

県立高等学校編成整備計画（案）

（令和4年度～令和13年度）

令和4年3月
沖縄県教育委員会

目 次

第1章 県立高等学校編成整備計画の基本方向

I 計画策定の基本的考え方	1
1 編成整備計画の性格	1
2 編成整備計画の期間	1
3 編成整備計画の進行管理	1
II 県立高等学校編成整備の現状及び課題等	2
1 社会の変化と生徒の多様化	2
2 県立高等学校の現状及び課題	3
3 第5期編成整備計画の実施状況	9
III 編成整備計画・学校づくりの在り方	11
1 進学率の設定	11
2 高等学校規模の適正化	11
3 各学科の入学定員の割合	13
4 学級減及び学校の統廃合	13
5 1学級あたりの入学定員の在り方	13
6 私立高等学校との定員調整	14
7 高等学校（学科）の適正な配置	14
IV 時代の変化に対応した魅力ある学校づくり	15
1 未来の沖縄を牽引しグローバルに活躍する人材の育成	16
2 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築の推進	18
3 多様な学びの享受に向けた学校づくり	19

第2章 県立高等学校編成整備計画の実施計画

I 未来の沖縄を牽引しグローバルに活躍する人材の育成	22
1 北部地区への併設型中高一貫教育校の設置	22
2 併設型中高一貫教育校への学科等の新設	23
3 中高一貫教育の推進	24
II 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築の推進	25
1 新たな併設型高等特別支援学校の設置	25
2 障害のある生徒とない生徒が共に学ぶしくみの研究	25
III 多様な学びの享受に向けた学校づくり	26
1 那覇地区定時制課程の再編	26
2 多様な教育ニーズに対応するための泊高等学校の改編	27
3 リスタート校（学び直し拠点校）としての定時制課程の連携	28
4 高等学校における多様な学びの在り方の研究	29
IV その他	30
時代に合った専門学科等の再編	30
（参考1）各学科の状況	31
（参考2）アンケート調査について	35

第1章 県立高等学校編成整備計画の基本方向

I 計画策定の基本的考え方

1 編成整備計画の性格

- 県立高等学校編成整備計画は、高等学校等の整備に関する総合的な計画として、高等学校の設置や統廃合、学科等の設置など、複数の個別計画から構成されます。
- 計画策定については、高等学校教育に係る国の動向等を踏まえつつ、関係法令や沖縄県教育振興基本計画を上位計画とし、県立高等学校の学校運営体制の課題改善を図ることなどを目的に、編成整備の基本方向とそれを受けた具体的内容を伴う実施計画を策定し、計画に沿った事業を展開していきます。
- 計画策定にあたっては、5期にわたる県立高等学校編成整備計画の取組状況の継続課題、重要性を増した課題、新たに生じた課題に対応するとともに、各高等学校に実施したアンケート調査の結果等を踏まえ、生徒の教育ニーズ等に対応できる高等学校の教育環境の整備を進めていきます。

2 編成整備計画の期間

- 概ね2030年の本県の将来像を示す「沖縄21世紀ビジョン」の実現に向けて策定される「新たな振興計画（仮称）」及び教育委員会の「沖縄県教育振興基本計画」の計画期間に準じ、令和4年度からの10年とします。ただし、計画の見直しについては、5年後を目処にその必要性を検討します。

3 編成整備計画の進行管理

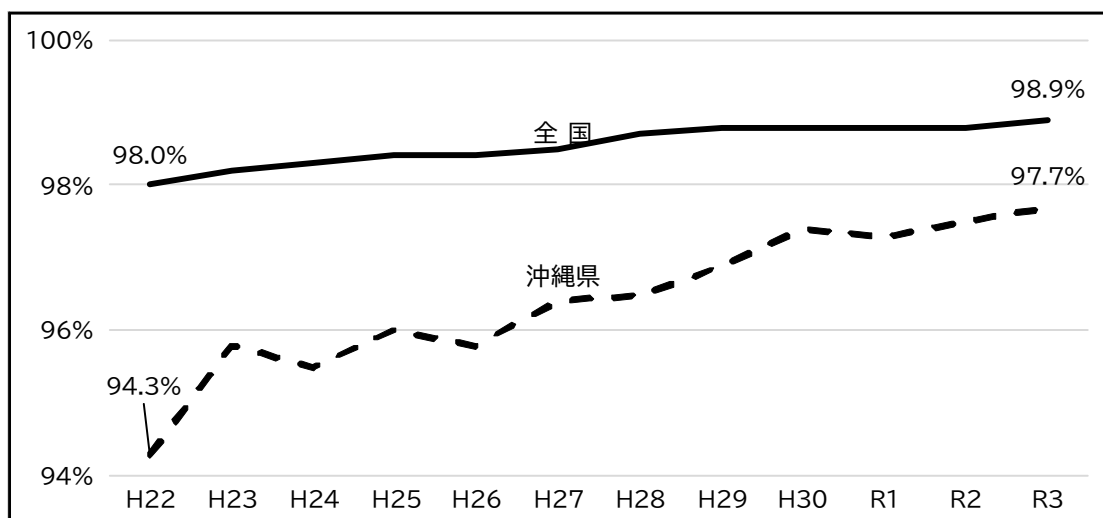
- 編成整備計画の推進にあたっては、計画の実施状況を評価・検証するとともに、国の文教施策や本県の教育施策等の動向、地域との連携の状況及び社会情勢の変化等により、必要に応じて計画の見直しを行うなど、柔軟に対応します。

II 県立高等学校編成整備の現状及び課題等

1 社会の変化と生徒の多様化

- グローバル化や人工知能（AI）をはじめとする技術革新の急速な進展によって、社会の変化は加速度を増してきており、物事を正確に予測することが困難な時代とされています。そのような時代だからこそ、子供たちには、受け身になることなく、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、自ら判断して行動し、豊かな人生を切り拓いていく力が必要であり、教育の重要性はますます高まっていくものと考えられます。
- また、令和3年3月における本県の中学校卒業者の高等学校等への進学率は、97.7%となり（図1）、中学校卒業者のほとんどが高等学校に進学する状況の中、高等学校に入学する生徒の能力、適性、興味・関心、進路等が一層多様化しています。大学等への進学を希望する生徒、就職を希望する生徒、多様な学習スタイルや学び直し^{*1}の機会を必要とする生徒など、様々な目的や学習ニーズを持った生徒が入学しています。
- このような状況を踏まえ、県立高等学校においては、特色ある学校づくりや教育内容の充実、指導方法の工夫・改善を行うなど、生徒一人一人の個性を伸ばす柔軟な教育を推進する必要があります。
- 概ね2030年の本県の将来像を示す「沖縄21世紀ビジョン」においては、子どもたちの笑顔が絶えない豊かな沖縄を「あるべき姿」とし、教育に関する部分では「人権尊重と共生」「グローバルな教育先進県づくり」「『海邦養秀』の拠点形成」を掲げ、時代の変化へ柔軟に対応し、先見性に富み、沖縄の発展を支える人材の育成が求められています。
- 県教育委員会においては、「沖縄県教育振興基本計画」に則り、県民ニーズに応じた教育機会を提供することにより、児童生徒等の学力向上に取り組むとともに、豊かな心と健やかな体を育み、生きる力の育成を図ることが重要であると考えます。

図1：高等学校等進学率



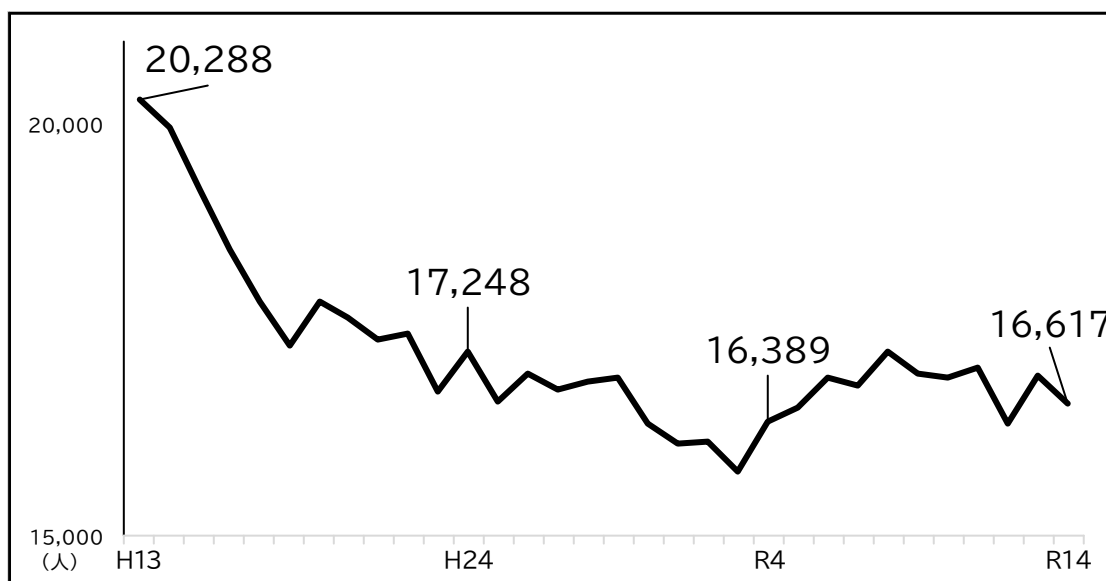
〔出典：文部科学省「学校基本調査」〕

*1 高等学校学習指導要領総則において「義務教育段階での学習内容の確実な定着を図る」と明記され、工夫の例として、ア. 義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための学習機会を設ける、イ. 必履修教科・科目の単位数を増加させ十分な習得を図る、ウ. 義務教育段階での学習内容の確実な定着を図ることを目標とした学校設定科目等を開設し必履修教科・科目の前に履修させる、があげられている。

2 県立高等学校の現状及び課題

- 令和3年度現在、県立高等学校は10市8町5村に59校設置され、そのうち普通高校（普通教育を主とする高校）は全日制38校（内定時制併設1校、通信制併設1校）、定時制1校（通信制併設）の計39校、専門高校（職業に関する専門教育を主とする高校）は全日制20校（内定時制併設5校）となっています。
- 中学校卒業生数は、平成13年の20,288人を最後に2万人を下回り、令和4年3月の卒業生数は推計で16,389人、平成13年と比べ約20%の減となっています。その後増減を経て、令和14年の卒業生数は推計で16,617人となり、今後10年間ほぼ横ばいになるものと推測されます(図2)。

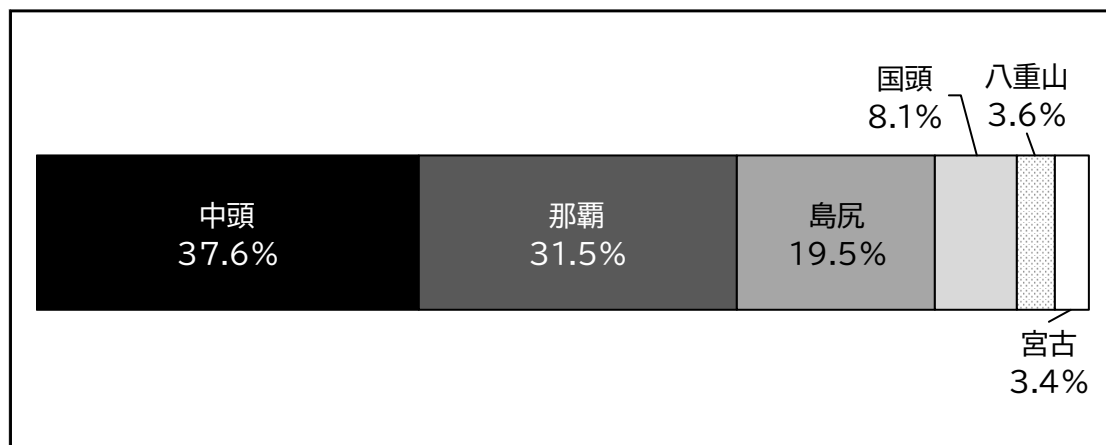
図2：中学校卒業生数の推移・推計



[出典：文部科学省「学校基本調査」(R12以降は出生数)をもとに推計]

- 中学校卒業生数は地域によって大きく異なります。本県の高等学校の規模も中南部に大規模校が多く、離島・北部地域に小規模校が点在するなどばらつきが見られます(図3)。

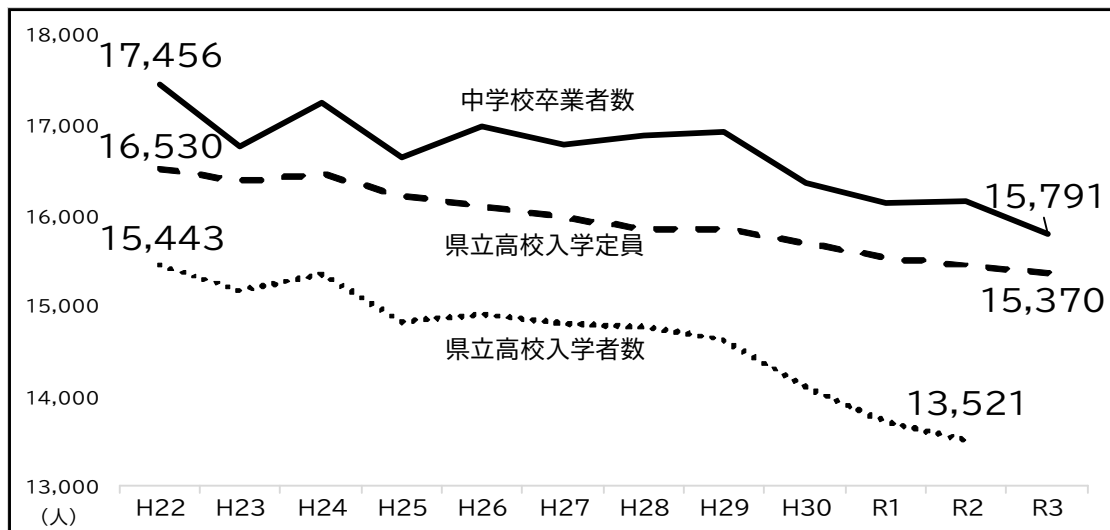
図3：令和3年3月中学校卒業生数地区別割合



[出典：文部科学省「令和2年度学校基本調査」をもとに推計]

- 県立高等学校入学定員の推移については、生徒数の減少に伴い、平成 22 年度入試では 16,530 人（通信制課程を含む）、入学者数は 15,443 人（同）となっているのに対し、令和 3 年度入試では 15,370 人、入学者数は 13,521 人と減少しています（図 4）。

図 4：県立高等学校入学定員推移



〔出典：文部科学省「学校基本調査」（中学校卒業生数及び県立高校入学者数）〕

- 令和 3 年度県立高等学校入学者選抜における、学科の種類毎の志願倍率をみると、全日制課程で情報に関する学科が 1.30 倍で最も高く、次いで普通科の 0.94 倍、水産に関する学科の 0.91 倍となっており、定員充足率は情報に関する学科が 100.0 %、その他専門に関する学科が 93.4 %、普通科が 91.9 %となっています（表 1）。
- 全日制課程における、一部の職業に関する学科の志願倍率の低さや、定員充足率については、当該学科の学科改編や統廃合による再編により改善を図り、多岐にわたる産業の特色や、ニーズに対応した人材を育成するため、職業に関する実践的な教育の充実を図り、専門的な知識・技能を高める必要があります。
- 定時制課程の志願倍率及び定員充足率の低さについては、ニーズの変化を踏まえて改善を図る必要があります。定時制課程教育の従来目的は、勤労青少年に対する高校教育を受ける機会の提供ですが、近年は、全日制課程から転・編入学する生徒や、過去に高校教育を受けることができなかった生徒など、多様な入学動機や学習歴を持つ生徒が増加しています。これらの多様な学習ニーズを持った生徒が学ぶことができるようにするため、柔軟に対応できる学校づくりが求められます。
- また、通信制課程においては、本来は自学自習が学習の基本となりますが、学習ニーズの多様化に伴い、自分で学習することが困難な生徒や、教員による日々の学習支援が必要な生徒が増加傾向にあります。全日制課程、定時制課程も含めて、入学前の段階で適切な進路選択ができるよう、各課程の特徴や各校の特色に関する積極的な情報提供及び中学校との更なる連携が必要となっています。

表1：令和3年度県立高等学校一般入試志願倍率・定員充足率

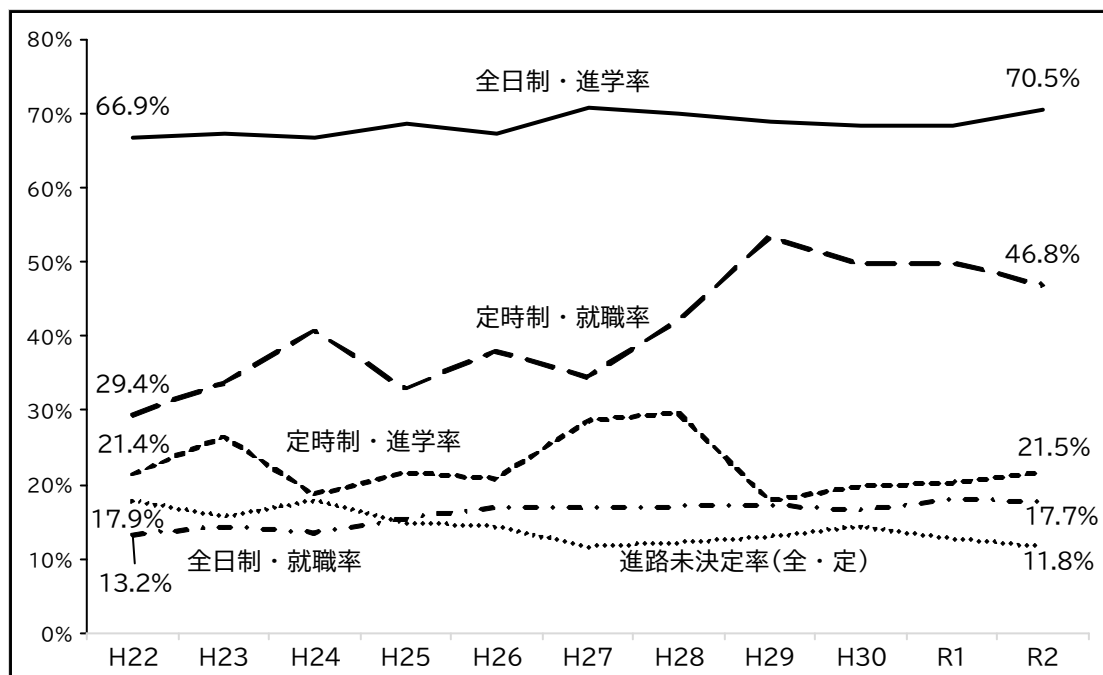
全日制課程	普通科	専門学科								総合学科
		農業	工業	商業	水産	家庭	情報	福祉	その他	
入学定員	8,360	880	1,640	1,440	120	200	120	80	1,120	600
一般入試倍率	0.94	0.84	0.89	0.88	0.91	0.70	1.30	0.80	0.90	0.76
定員充足率	91.9%	80.1%	87.0%	90.1%	77.5%	69.5%	100.0%	76.3%	93.4%	81.2%

定時制課程	普通科	専門学科		
		農業	工業	商業
入学定員	200	80	80	120
一般入試倍率	0.33	0.38	0.11	0.42
定員充足率	33.5%	51.3%	31.3%	53.3%

通信制課程	普通科
入学定員	330
一般入試倍率	0.79
定員充足率	76.4%

- 県立高等学校卒業者の進路状況は、全日制課程においては、進学率、就職率ともに上昇傾向にあり、定時制課程においては、進学率は横ばい、就職率は上昇しています。一方で、卒業後の進路未決定率も近年は12%前後で推移していることから、生徒が早期に進路を選択できるようキャリア教育の充実等を図るとともに、就職希望者、進学希望者双方への、個に応じた指導を更に充実させる必要があります(図5)。

図5：県立高等学校課程別進路状況推移



[出典：文部科学省「学校基本調査」]

- 令和2年3月県立高等学校卒業者の進路状況は、大学等への進学が5,211人、全卒業者数の38.5%と最も多く、次いで専修学校等への進学が4,263人、31.5%、就職2,441人、18.0%の順となっています(表2)。

表2：令和2年度県立高等学校学科別・進路別卒業者数(単位：人)

全日制	卒業生数	大学等		専修学校等		就職	
普通科	8,205	3,878	47.3%	2,706	33.0%	601	7.3%
農業	648	54	8.3%	235	36.3%	295	45.5%
工業	1,382	151	10.9%	342	24.7%	802	58.0%
商業	1,225	210	17.1%	518	42.3%	347	28.3%
水産	57	19	33.3%	7	12.3%	30	52.6%
家庭	116	27	23.3%	32	27.6%	53	45.7%
情報	103	36	35.0%	24	23.3%	34	33.0%
福祉	65	10	15.4%	12	18.5%	40	61.5%
その他	991	685	69.1%	99	10.0%	30	3.0%
総合学科	595	128	21.5%	267	44.9%	135	22.7%
計	13,387	5,194	38.8%	4,242	31.7%	2,367	17.7%

定時制	卒業生数	大学等		専修学校等		就職	
普通科	49	7	14.3%	5	10.2%	15	30.6%
農業	31	4	12.9%	4	12.9%	16	51.6%
工業	33			1	3.0%	20	60.6%
商業	45	2	4.4%	11	24.4%	23	51.1%
計	158	13	8.2%	21	13.3%	74	46.8%

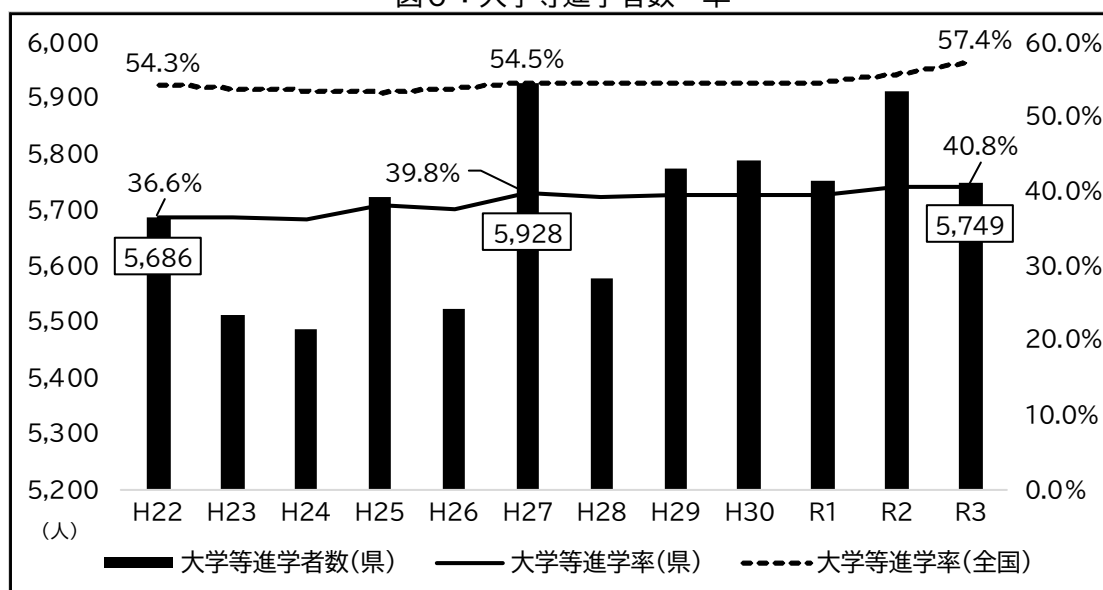
合計	13,545	5,211	38.5%	4,263	31.5%	2,441	18.0%
----	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

※%は学科の卒業生数に占める割合

[出典：文部科学省「令和2年度学校基本調査」]

- 本県の高等学校卒業者の大学等進学率は、平成22年には36.6%でしたが、令和3年には40.8%と、4.2ポイント上昇しています。しかし様々な要因から全国とは未だ17%程度の開きがあることから、キャリア教育の充実など、生徒が早期に進路を選択し意欲的に学べる環境づくりに、より一層取り組む必要があります(図6)。

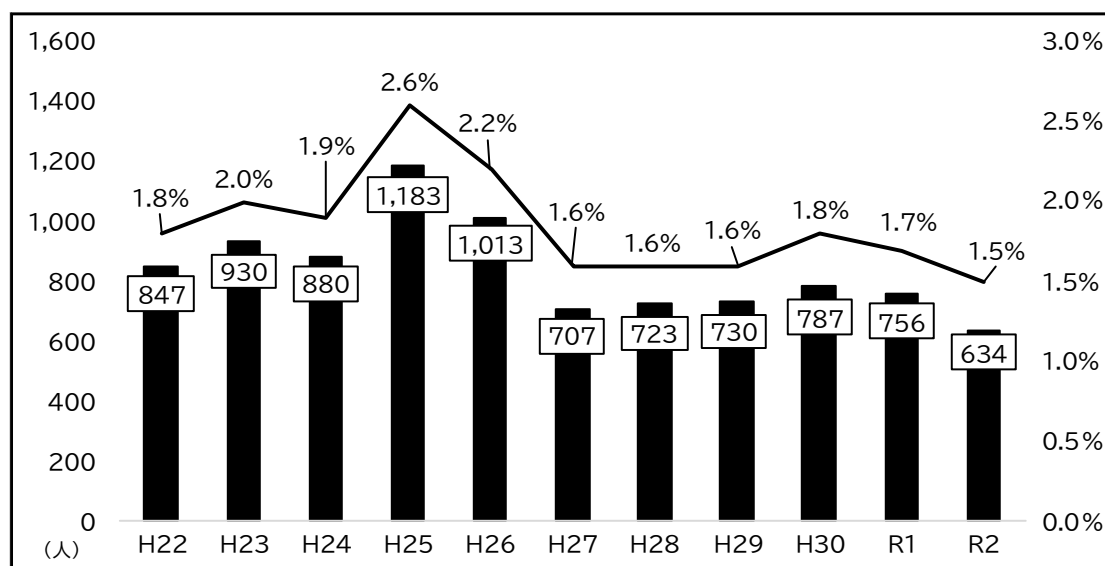
図6：大学等進学者数・率



[出典：文部科学省「学校基本調査」]

- 県立高等学校の中途退学者は、近年 1.6 %前後で推移しており、直近では令和 2 年に 634 人、1.5 %と、全国平均の 1.1 %より 0.4 ポイント高くなっています（図 7）。中途退学の主な要因は「進路変更」が最も多く、全体の 70.0 %を占め、次いで「学校生活・学業不適応」14.7 %、「家庭の事情」が 3.5 %となっています。
- 不登校者は、これまで 3.0 %前後を推移していましたが、直近では令和 2 年に 797 人、1.9 %となっています（図 8）。その主な要因は「無気力・不安」が最も多く、全体の 33.2 %を占め、次いで「生活リズムの乱れ、あそび、非行」23.1 %、「入学・転編入学・進級時の不適応」10.5 %となっています。
- 休学者は、これまで 1.4 %前後を推移していましたが、直近では令和 2 年に 408 人、1.0 %となっています（図 9）。休学の主な要因は「仕事やアルバイトの都合」が 120 人で最も多く、全体の 29.4 %を占め、次いで「進路の悩み」70 人、17.2 %、「勤怠不良や怠学による」60 人、14.7 %となっています。
- 令和 2 年度の中途退学者、不登校者、休学者の総数は、1,839 人、4.5 %に上り、全国と比較しても高い状況にあり、沖縄県の教育課題の一つにあげられます。生徒一人一人が将来豊かな人生を送れるよう、社会的自立に向けた指導・支援の更なる充実が求められます。

図 7：県立高等学校中途退学者数・率



※ H25 から通信制含む。

图8：県立高等学校不登校者数・率

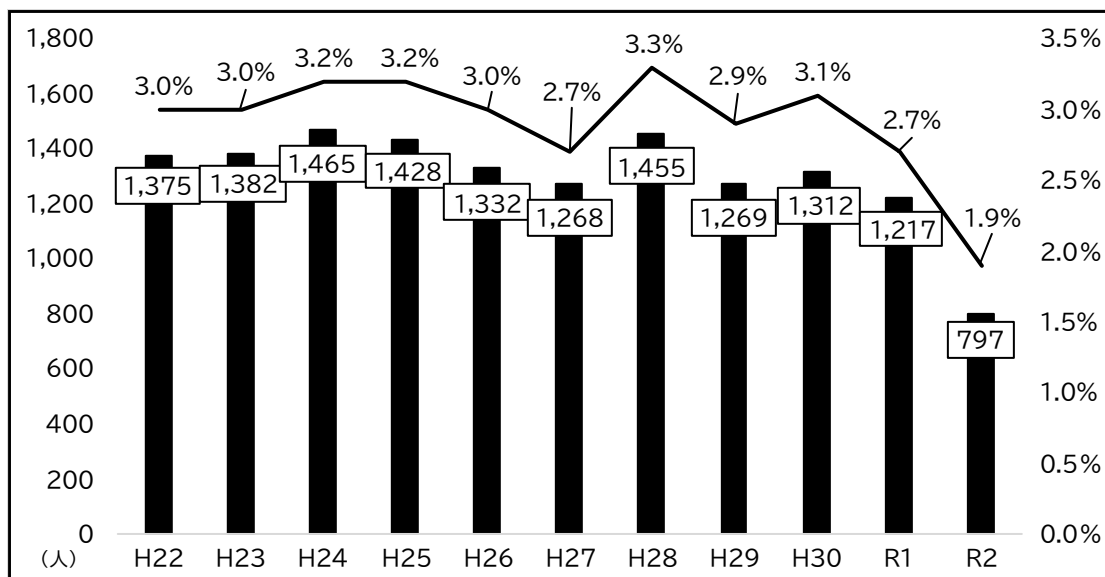
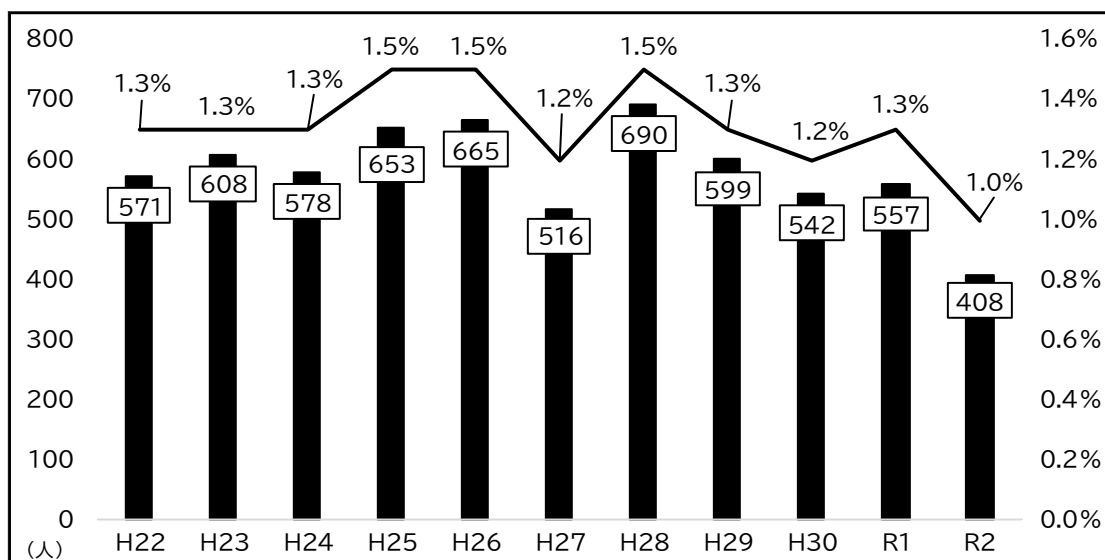


图9：県立高等学校休学者数・率



3 第5期編成整備計画の実施状況

- 本県における県立高等学校の編成整備は、復帰後、第1期から第5期にわたる「県立高等学校編成整備計画」に基づき、各年度毎の学校数、学級数、入学定員等の適切な配置や規模の適正化を進め、単位制やコース制の導入、専門学科の増設、総合学科の設置、学校の再編等を推進し、高等学校教育の機会均等の確保や教育水準の維持向上が図られてきました。
- 平成24年3月に策定された第5期県立高等学校編成整備計画においては、社会の変化等による生徒の多様化に対応するため、新しい学科の設置や新しいタイプの学校への再編等が計画され、14の実施計画のうち、実施済みの計画が4、未実施が9、変更後実施が1となりました(表3)。

表3：第5期編成整備計画実施状況

	計画箇所	実施状況
学科設置	名護高校に理数科等 大学進学に特化した 学科の設置	平成27年4月に新学科(フロンティア科)2クラスを設置。国公立大学現役合格者数が増加するなど、成果が現れている。
再編等	南部工業高校を 沖縄水産高校へ統合 辺土名高校の 名護高校分校化	関係機関等との意見交換を行い、様々な観点から再検討した結果、両校とも単独校としての活性化が可能であると判断し、平成25年3月に計画の見直しを決定した。地元からの単独校としての存続要請もあり、入学者数の推移や地域の実情等も踏まえつつ状況を注視することとした。
	本部高校を 北山高校へ統合	地元自治体が両校を支援する独自の取組を行っていることから、入学者数の推移や地域の実情等も踏まえつつ状況を注視することとした。
	久米島高校園芸科の 廃科/普通科への園 芸コース設置	地元が園芸科存続と普通科2クラス維持を要請し、町全体の教育振興策の一環として同校を支援する独自の取組を行っていることから、入学者数の推移や地域の実情等も踏まえつつ状況を注視することとした。
	伊良部高校を 宮古高校へ統合	伊良部島の人口減少に伴い、伊良部高校入学者の減少傾向が顕著であったことと、島内中学生の同校入学希望者が各学年1、2名と少人数であったことから、平成31年度に入学者募集停止が決定し、令和2年度をもって閉校となった。
	陽明高校・真和志高 校の学科改編	陽明高校については、平成26年度に介護福祉科を総合学科に改編し、真和志高校の介護福祉コースは、平成29年度に「みらい福祉科」に改編した。
	過大規模校の適正規 模化	適正規模化を進めた結果、平成22年度に13校あった全日制課程における過大規模校(1学年9学級以上)は、令和3年度には9校となっている。
新しいタイプの学校の	中部地区、南部地区 の学校をフューチャ ースクールに再編	フューチャースクール ^{*2} への再編については、対象校の絞り込みが難航したため、計画実施に至らなかった。
	沖縄インターナシヨ ナル中等教育学校 (仮称)の設置	第4期編成整備計画に引き続き、設置の有無を検討することとしたが、全て英語で行う授業の実施は、教員、生徒の実態と合わないなど、課題が解消されていないことから、計画実施に至らなかった。
の学校	中等教育学校 ^{*3} (仮 称)の設置	中高一貫教育校の設置を検討した際に、設置形態を中等教育学校とした場合、高校の入学定員を半減する必要があったことなどから、形態を併設型中高一貫教育校とした。また、生徒、保護者のニーズや財政状況等を考慮した結果、県立高校への導入が望ましいとされ、平成28年4月に開邦中学校及び球陽中学校を開校した。

*2 フューチャースクール(FUTURE SCHOOL)は、多様な学習ニーズに対応できる「学び直し」を具現化する学校として、全日制高校で学ぶ意欲のある生徒に対して教育機会を拡大し、生徒個々に応じた多様な学びができ、地域も生徒の教育を支援する学校であり、柔軟性を持ち(Flexible)、常に上を向いて(Up)、人を信じ(Trust)、礼を尽くして(Urbane)、努力し(Reach)、目標をつかむ(Exceed)の頭文字をとったものである。

*3 小学校における教育の基礎の上に、義務教育として行われる普通教育(前期中等教育)並びに高度な普通教育(後期中等教育)及び専門教育を一貫して施すことを目的とする、中学校と高等学校を合わせた年限に相当する6年間の一貫教育を行う学校。

	計画箇所	これまでの実施状況及び実施に至らない理由等
定 時 制 課 程 等 再 編	那覇工業高校定時制課程の再編	計画策定当時は高かった定時制のニーズは低下傾向であり、同校定時制課程の再編については計画実施に至らなかった。
	中学生支援センター(仮称)の設置	
	八重山商工高校定時制課程定員過半数割れ2年連続による募集停止	生徒数の減少傾向が続く中、令和元年度入学者募集において初めて2年連続定員過半数割れに至ったが、八重山地区において、同校定時制課程は、中学時不登校等様々な背景がある生徒の受け皿になっていることから、状況を注視することとした。

- 第5期県立高等学校編成整備計画の実施上の課題としては、学校の統廃合に関して地域の理解を得ることが困難であったこと等があげられます。高等学校においては、生徒の能力、適性、興味・関心、進路等が多様化していることから、それぞれの個性を最大限に伸ばし選択幅を拡大するためにも、一定規模が必要であると考えます。一方で、高等学校や高校生が存在が地域の活力を引き出している面もあり、特に人口減少地域においては、学校の統廃合については、入学者数の推移や地域の実情等も考慮しながら、引き続き検討する必要があります。
- 全日制課程の学校規模については、平成22年度は1学年9学級以上の学校は13校、4～8学級の学校は39校、3学級以下の学校は7校でしたが、令和2年度の状況を見ると、1学年9学級以上の学校は9校、4～8学級の学校は42校、3学級以下の学校は7校となっており、学校の適正規模化を図ってきました。
- 新しいタイプの学校については、多様な学習ニーズに対応できる学び直しを具現化する学校として、フューチャースクール(FUTURE SCHOOL)が計画されました。対象校の絞り込みが難航したため、計画の実施には至っていませんが、社会の変化等により生徒も多様化していることから、今後も学び直しの場について、様々な検討をする必要があります。

Ⅲ 編成整備計画・学校づくりの在り方

- 沖縄県教育振興基本計画では、本県教育の目標を以下のとおり定めています。

県は、個性の尊重を基本とし、国及び郷土の自然と文化に誇りをもち、創造性・国際性に富む人材の育成と生涯学習の振興を期して、次のことを目標に教育施策を推進する。

自ら学ぶ意欲を育て、学力の向上を目指すとともに、豊かな表現力とねばり強さをもつ幼児児童生徒を育成する。

平和で安らぎと活力ある社会の形成者として、郷土文化の継承・発展に寄与し、国際社会・情報社会等で活躍する心身ともに健全な県民を育成する。

学校・家庭・地域社会の相互の連携及び協力のもとに、時代の変化に対応し得る教育の方法を追究し、生涯学習社会の実現を図る。

- また、学校教育法では、高校教育の目標として次のように定めています。

- 一 義務教育として行われる普通教育の成果を更に発展拡充させて、豊かな人間性、創造性及び健やかな身体を養い、国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと。
- 二 社会において果たさなければならない使命の自覚に基づき、個性に応じて将来の進路を決定させ、一般的な教養を高め、専門的な知識、技術及び技能を習得させること。
- 三 個性の確立に努めるとともに、社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養うこと。

- 以上の目標を実現するため、本県における学校づくりの在り方を次のように示しました。

1 進学率の設定

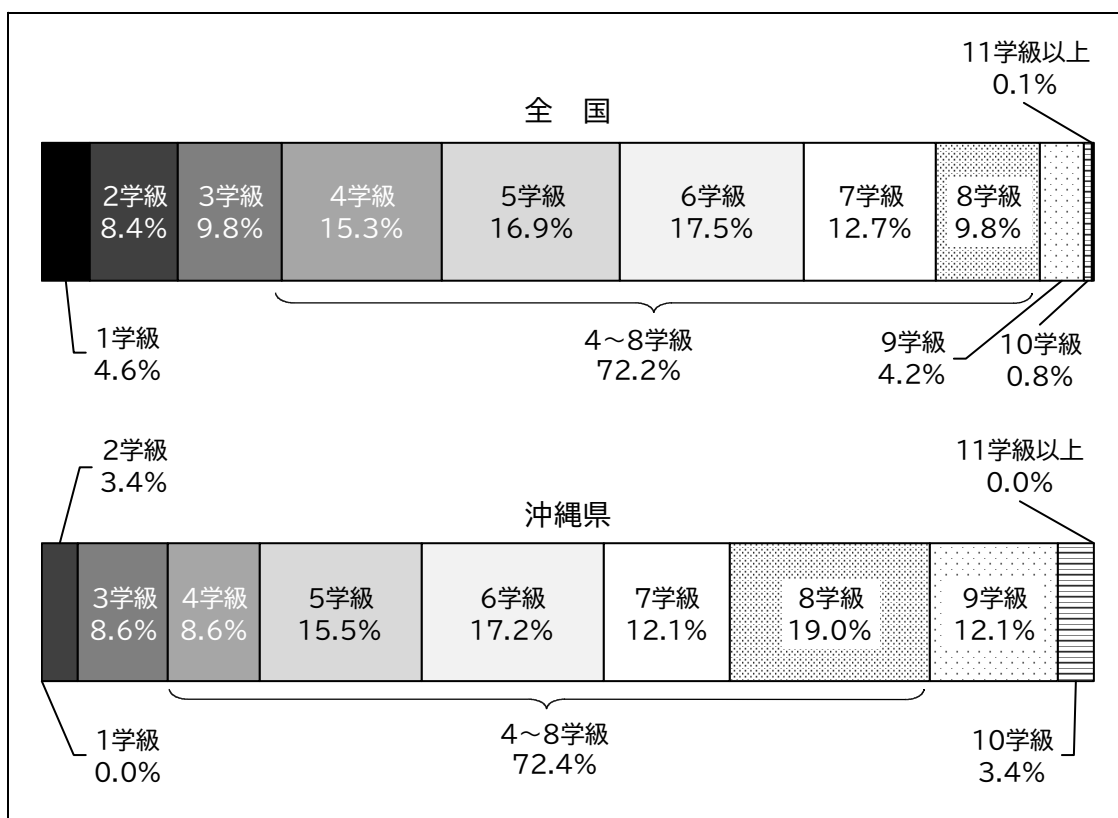
- 令和3年度における高等学校等進学率は、県が 97.7 %、全国が 98.9 %となっています。本県の高等学校等進学率については、目標値である全国平均を達成するために、生徒の学習ニーズの多様化を踏まえながら魅力ある学校づくりを進めていく中で向上を図ります。

2 高等学校規模の適正化

- 第4期及び第5期県立高等学校編成整備計画においては、高等学校の適正規模を1学年4～8学級としています。
- 令和3年度現在、適正規模に満たない高等学校数は、全日制で1学年3学級の学校が5校、2学級が2校、定時制で1学年2学級が1校、1学級が5校となっています。また、全日制で適正規模を超える学校数は、1学年9学級が7校、10学級が2校となっています。
- 高等学校においては、生徒が自分の能力、適性、興味・関心、進路等に応じて多くの教科・科目の中から自主的に選択して学習できるなど、生徒の多様なニーズに応じて個々の能力を伸ばすための教育課程を編成したり、学校行事や部活動の充実が図られるような教育環境を確保するためには、ある程度の学校規模が必要です。

- 高等学校の適正規模について国の基準等はありませんが、義務教育に係る国の基準は、小学校・中学校とも「12 学級以上 18 学級以下」を標準としており、地域の実態その他により特別の事情があるときは、この限りではないとされています。
- 高校の適正規模に関する全国の状況は、4～8 学級が 23 道県と最も多く、次いで6～8 学級が6 府県、基準なし 11 都府県、その他7 県となっています。また、1 学年4～8 学級の学級規模割合が多く、本県においても同様の傾向となっています（図 10）。
- このような状況や中学校卒業生数の推移、県立高校へのアンケートなどを考慮し、本計画においても引き続き、1 学年4～8 学級を基本とします。
- 離島・北部地域については、高等学校や高校生の存在が地域の活力を引き出している面もあることから、適正規模を下回る高等学校であっても、生徒や地域の実情に即し地域と連携を図りながら、特色ある学校づくりに取り組んでいる学校については、1 学年2 学級以上を基本とします。
- また、1 学年9 学級以上の高等学校については、地区内の中学校卒業生数の推移、入学者選抜の状況や学校運営の影響等を考慮し、学校の適正規模化を検討していく必要があります。

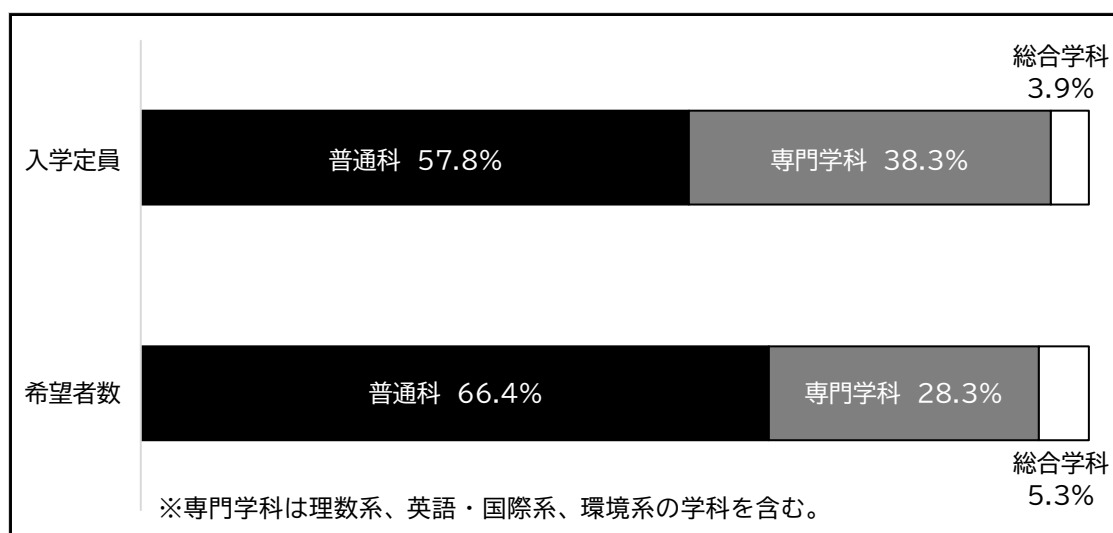
図 10：令和3年度 学級規模別学校数の割合



3 各学科の入学定員の割合

- 令和3年度県立高等学校入学者選抜における入学定員の割合は、普通科 57.8 %、専門学科 38.3 %、総合学科 3.9 %となっています。一方、令和2年度に実施した中学生への調査によると、普通科への入学を希望する生徒は 66.4 %、専門学科は 28.3 %、総合学科は 5.3 %となっており、普通科では入学希望者の方が定員より+8.6 %、総合学科では+1.4 %多く、専門学科では△ 10.0 %少ない結果となっています（図 11）。
- 各学科の定員については、このような状況を踏まえつつ、実際の入試における定員充足率等を分析し、適切に設定する必要があります。また、特に入学希望者数と定員に開きがある専門学科においては、学科の再編や柔軟な教育課程の編成等による特色ある学校づくりをより一層推進することが求められます。

図 11：令和3年度 県立高等学校入学定員と入学希望者数の比較



4 学級減及び学校の統廃合

- 各学科において、1学級定員の過半数（21人以上）の定員割れが2年連続して生じた場合は、原則、3年目の入学者選抜から学級数を減じます。また、収容定員が240人（1学年2学級）を満たさないことが見込まれる学校については、地域の実情を十分考慮したうえで、近隣学校との統合等を検討します。さらに、小規模の学校において、地域の中学校卒業生数や入学者数の状況等も踏まえ、将来にわたって生徒数が増加する見通しが立たないと見込まれる場合には、複数の学校間での再編統合等も検討します。

5 1学級当たりの入学定員の在り方

- 1学級当たりの入学定員は、「公立高等学校の設置、適正配置および教職員定数の標準等に関する法律」に基づき、原則として40人とします。
- 今後、1学級当たりの入学定員については、国の教育政策の動向や社会の変化、高等学校の状況等を踏まえ、総合的に検討していきます。

6 私立高等学校との定員調整

- 公私立高等学校の入学定員については、沖縄県公私立高等学校協議会において協議しながら、調整を図ります。

7 高等学校（学科）の適正な配置

- 高等学校は、中学校を卒業したほとんどの生徒が進学する教育機関となっており、多様な入学動機や進路希望、背景を持つ生徒が在籍しています。このような状況を踏まえ、在籍する生徒の多様な実情・ニーズに応じて、生徒一人一人の個性を伸ばす柔軟な教育を推進します。

・普通科

普通科については、大学進学等へのニーズに対応できるよう、各地域・学区に置くことが望ましいと考えます。また、学習に対するニーズが多様化する中、全国の普通科では大学入試を想定した画一的な指導が目立つなど、特色に乏しいという指摘を受け、国は高校教育改革、特に普通科の特色化・魅力化を図るため関係法令を改正しました。「SDGs 等に関わる学際科学的な学びに関する学科」や「地域社会が抱える課題の解決に向けた学びに関する学科」など、特色・魅力ある学科の設置が各設置者の判断によって可能となっており、今後の国の動向を注視しながら、本県における普通科の在り方についても議論する必要があります。

・専門学科

社会のグローバル化や技術革新の急速な進展によって、専門的な知識・技能が高度化・多様化している分野や職業があることを踏まえ、これら分野等への対応を視野に入れた教育課程の編成が必要になります。加えて、大学等への進学率が高くなっていることから、各学校の進学希望者への指導を更に充実させる必要があります。

また、志願倍率が低下し、定員割れの状況が続く専門学科もあることから、各分野の人材需要や社会の状況等を注視しながら、学科の再編等について議論する必要があります。

・総合学科

既存の学校については、多様な進路実現や生徒の主体的な学習体系について、生徒や保護者のニーズに応えていることから、総合学科の理念や目的を踏まえて更に充実に努めていきます。

・中高一貫教育校

中高一貫教育校については、中学校と高等学校を接続し、6年間の教育を計画的・継続的に行うことで、生徒の個性や能力を伸ばすとともに、難関大学進学等への対応を図っており、今後も、将来本県を牽引する高い志を持ったグローバルに活躍できる人材の育成が必要であることから、中高一貫教育の充実に努めていきます。

IV 時代の変化に対応した魅力ある学校づくり

- 中央教育審議会は、現在の高等学校が抱える課題について、「多様な生徒が進学している中で極めて幅広いものとなっており、例えば、義務教育段階での学習が十分に身につけていない者や中途退学経験者、不登校経験者、特別な支援を必要とする生徒などへの対応が必要となる一方で、より高度な教育機会を提供することにより一層向上し得る生徒への対応も必要となるなど、それぞれの多様な生徒の学習形態や進路希望に応じたきめ細やかな対応が求められている」としています*4。
- さらに、高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）においては、これからの学校に求められることとして、「一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること」をあげています。
- すべての生徒に、基礎・基本の定着を図ることで、大学等への進学に必要な教育を求める者、就職等に必要の専門教育を求める者、多様な学習スタイルや学び直しを必要とする者など、様々な生徒のニーズに対応できる教育環境を整備することが求められます。また、生涯にわたる多様なキャリア*5 形成に必要な能力や態度を育成するため、キャリア教育*6 を推進するとともに、専門的な知識・技能を身につけることといった多様な希望にも応えるために、職業教育*7 の展開を図るなど、多様な進路実現が可能になる高校づくりを進めることが必要になります。
- また、グローバル化や人工知能（AI）をはじめとする技術革新の急速な進展に対応するため、国際性と多様な能力を涵養し、国際的に活躍できる人材の育成を図る教育プログラムや、ICT を最大限に活用した教育環境の整備など、新たな学習環境の充実にも取り組む必要があります。
- 生徒が、自分の能力、適性、興味・関心、進路等に応じて多くの教科・科目の中から自主的に選択して学習したり、学校行事や部活動などで充実した学校生活を送るためには、ある程度の学校規模が必要です。全国の様相も注視しつつ、本県の生徒や地域のニーズなどを踏まえながら改善を図ることが求められます。また、離島・北部地域については、高等学校や高校生の存在が地域の活力を引き出している場合が多いため、小規模であっても生徒や地域の実情に即し、地域と連携を図りながら、特色ある学校づくりに取り組むことが必要になります。

*4 中央教育審議会初等中等教育分科会高等学校教育部会 審議まとめ～高校教育の質の確保・向上に向けて～（平成 26 年 6 月）

*5 人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね。（平成 23 年 1 月中教審答申）

*6 一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育。（平成 23 年 1 月中教審答申）

*7 一定または特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育。（平成 23 年 1 月中教審答申）

1 未来の沖縄を牽引しグローバルに活躍する人材の育成

(1) 背景

- 天然資源の少ない島しょ圏である本県の発展に最も重要な要素は人材であり、概ね 2030 年の本県の将来像を示す「沖縄 21 世紀ビジョン」においても、最も力を入れるべき政策の一つとして「人材育成」が掲げられています。
- しかし、全国的に大学等進学率が上昇傾向にある中、本県においては、県内大学等の定員が限定的であることや、生徒の地元志向などの要因から、大学等進学率の低水準が続いており、依然として全国平均と開きがある状況となっています（P.6 図6）。
- 本県生徒の県内大学等占有率は既に 7 割を超えており、大学等進学率の改善を図るためには、学力向上に加えて、県外大学等への進学を促進する必要があります。
- また、難関国立大学への進学者数も他県を下回る状況が続いており、将来さまざまな分野で本県をリードする人材を育成するためには、生徒の資質・能力の更なる向上を図る取組が必要となっています。
- その一方で、離島県であることや、未だ全国水準を下回る県民所得などが要因となり、大きな経済負担となる県外大学等への進学を躊躇する生徒もいることから、国や県で給付型奨学金制度を創設するなど、負担軽減に取り組んでおり、制度の実施状況を踏まえ、より一層の充実について今後検討する必要があります。

(2) 本県の現状

- 本県においては、生徒の県外大学等への進学を促進するため、選抜した生徒を県外へ派遣し、県外大学等での講義の受講や学生との交流等を行うことで、大学等進学率の向上を図っています。
- 教員に対しては、教科指導力の専門化や進路指導力の深化を図るため、教員指導力向上プログラムを実施するとともに、進学実績のある高校や地域の拠点校を「進学重点拠点校」に指定し、教員の指導力向上と授業改善に取り組んでいます。
- また、県外指定大学への入学及び修学を支援するための給付型奨学金制度を創設し、能力があるにも関わらず、経済的な理由で県外進学が困難な生徒の県外大学等への進学促進を図り、本県におけるグローバル人材の育成に取り組んでいます。
- さらに、難関大学等への進学を目指す生徒のニーズに応えるため、平成 28 年度に併設型中高一貫教育校を 2 校設置し、中高 6 年間の計画的・継続的な教育指導を展開しています。
- このような取組の結果、大学等進学率、県外国公立大学進学者数、難関国立大学進学者数は改善傾向にあり、成果が徐々に現れつつありますが、未だ全国との差の解消には至っていない状況にあります。

(3) 今後の方向性

- 資源に乏しい本県においては、若い人材が最大の強みであり、未来の沖縄を牽引し、グローバルに活躍する人材を育成するため、これまでの取組の成果を多角的に検証し、課題解決に向けて取り組めます。
- 既設の中高一貫教育校においては、6年間を見通した教育課程の更なる充実に取り組む必要があることから、学科改編等も含め、中高一貫教育の成果がより一層得られるような学校づくりに取り組むとともに、北部地区における併設型中高一貫教育校の設置を推進し、同地区における人材育成及び教育環境の充実を図っていきます。
- 生徒の資質・能力の向上や教員の指導力向上等に継続的に取り組むとともに、難関国立大学進学者数等の増加を目指した学科改編や中高一貫教育の推進など、人材育成に必要な教育環境の整備に取り組めます。また、新たな中高一貫教育校の設置については、既設校の実績や課題も見つつ、県全体や地域の状況を踏まえ検討します。

2 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築の推進

(1) 背景

- インクルーシブ教育システムにおいては、障害のある者とない者が同じ場で学ぶことを追求するとともに、個別の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して、自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も確に答える指導を提供できる、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要です。
- 本県においては、県立特別支援学校編成整備計画（平成 24 年度～令和 3 年度）に基づき、平成 28 年度と平成 29 年度に、県立高等学校に合計 4 校の併設型高等特別支援学校を設置しています。

(2) 本県の現状

- 本県における高等学校への障害のある生徒の入学は、増加傾向にあります。障害のある生徒が学ぶための特別支援教育支援員の配置や合理的配慮の充実により、高等学校における学習環境の整備が図られてきています。
- 本県においては、これまで中部地区に中部農林高等支援学校、那覇南部地区に陽明高等支援学校、南風原高等支援学校、やえせ高等支援学校を設置し、各高等学校の教育課程と連携した、地域に密着した職業教育を推進し、生徒の自己管理能力や就労意欲を育成することで、卒業後の就職・社会的自立が図られています。
- また、高等学校においては、障害のある生徒とない生徒の交流及び共同学習を推進し、障害理解や、相互に人格と個性を尊重しあえる風土の形成に取り組んでおり、「共生社会」の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築も推進されています。

(3) 今後の方向性

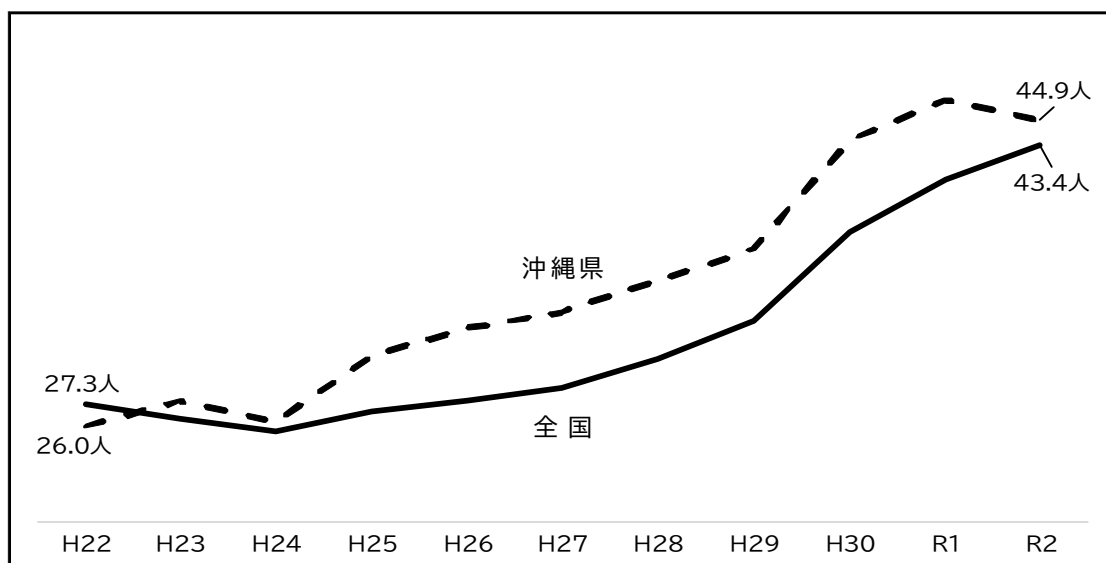
- 既設の併設型高等特別支援学校への入学志願状況等を踏まえ、新たな併設型高等特別支援学校の設置に取り組みます。
- 高等学校におけるインクルーシブ教育システム構築の更なる推進を図る目的から、併設型高等特別支援学校等の設置や学級増を行い、「交流及び共同学習」の充実を図るとともに、本県高等学校における「多様な学びの場」の在り方を検討します。

3 多様な学びの享受に向けた学校づくり

(1) 背景

- 高等学校等進学率は、令和3年度は97.7%と、ほとんどの生徒が高等学校へ進学しています（P.2 図1）。就職する際の応募要件に大学や高校卒業以上を要件としている企業が多く、高等学校を卒業することは社会に出る機会の拡大に繋がることから、進学意欲のある生徒に就学機会を与えることは非常に重要です。
- 一方、社会の急速な変化に伴い、子どもを取り巻く家庭や地域社会の在り方も大きく変容し、複雑化していることから、全国的に不登校生徒は増加しており、その中でも沖縄県の「1,000人当たりの不登校生徒数（中学校）」は全国平均より高くなっています（図12）。

図12：中学校1,000人あたりの不登校生徒数推移



〔出典：文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」〕

- 高等学校等進学率や不登校率の高まりを背景として、多様な生徒が高等学校に入学していますが、入学しても、基礎的な学力が備わっていなければ授業について行けず、学業不振から中途退学に陥る可能性が高くなります。勉強につまずき、挫折を繰り返していけば、自己肯定感を育むことはできず、社会に出る自信を失っていくという、悪循環に陥る可能性があります。
- 生徒一人一人の状況に合った学び直しにより、「わかること」の楽しさや「やればできる」という自信を少しずつ積み重ね、確かな学力を身に付けさせるとともに、学校生活の中で、社会性や基本的な生活習慣等を身に付けることで自立を促すため、生徒個々に合ったきめ細かな支援の必要性、重要性が高まっています。
- 資源に乏しい沖縄にとって若い人材は最大の強みであることから、未来を担う人材の育成について早急に取り組む必要があります。
- 本県では、第5期県立高等学校編成整備計画において、既設校を学び直しの学校として設置することとしていましたが、対象校の絞り込みが難航し、計画は実施できていないことから、学び直しの学校の設置については慎重に進める必要があります。一方、多くの県で学び直しを主体とする学校やコースの設置が進みつつあり、ニーズの高まりが伺えます（表4）。

表4：学び直しを主体とする主な公立高等学校

都道府県名	学校名	学科名	総称又は小学科名（コース名）	単位制
茨城県	茨城東高校 他1校	普通科	アクティブスクール	○
千葉県	泉高校 他3校	普通科	地域連携アクティブスクール	
東京都	足立東高校 他3校	普通科	エンカレッジスクール	
	練馬工業高校 他1校	専門学科（工業）	エンカレッジスクール	
神奈川県	田奈高校 他4校	普通科	クリエイティブスクール	
大阪府	西成高校 他7校	総合学科	エンパワメントスクール	
長崎県	五島南高校	普通科	（夢トライコース）	○
鳥取県	岩美高校	普通科		
	倉吉農業高校	専門学科（農業）	生物科、食品科、環境科	

(2) 本県の現状

- 第5期編成整備計画策定時には、定時制高校のニーズは高く、志願倍率も高い状況でしたが、徐々に低下し、現在は定員割れの状況となっています（表5）。働きながら学ぶ生徒は、時代の変化等により減少傾向にある一方、不登校経験者など多様な生徒が多く在籍しています。
- そのような状況に対応するため、県内の定時制高校では、学校設定科目として、1年次に中学校レベルの学び直しの授業受講を必須としたり、家庭学習として、中学校レベルのプリントを用いるなど、学校現場で工夫して取り組んでいます。
- 一方、中学時不登校だった生徒がやる気を出し国立大学に合格したり、競技や習い事の練習時間を優先するため、単位制である定時制高校を選ぶ生徒がいるなど、多様な生徒が自分のペースで学習できる環境もあります。
- 定時制高校は基本的に修業年限が4年であることから、生活の中で余裕を持って授業を受講でき、自ら興味のある科目を選択することができる単位制であることなどから、全日制に比べ生徒がそれぞれの状況に応じて学習しやすい環境にあります。
- また、農業や商業などの、主として専門学科において開設される教科は、国語や数学のような各学科に共通する教科とは授業形態が異なることから、学びが継続しやすい状況にあると考えられます。
- 以上の状況を踏まえ、学び直しの機会の提供と定時制課程の再編を総合的に議論する必要があります。

表5：本県の定時制課程高等学校の入学状況（令和3年度入学者選抜）

学校名	部・学科	定員	合格者	定員充足率
北部農林高校	農業科	40	10	25.0%
コザ高校	商業科	40	35	87.5%
中部農林高校	農業科	40	31	77.5%
泊高校	午前部・普通科	120	55	45.8%
	夜間部・普通科	80	12	15.0%
那覇商業高校	商業科	40	15	37.5%
那覇工業高校	工業科	80	25	31.3%
八重山商工高校	商業科	40	14	35.0%

(3) 今後の方向性

- 中央教育審議会は、今後の定時制高校の役割について、「生徒の多様化が進む中では、定時制・通信制の高等学校が、従来からの勤労青年のための後期中等教育機関としての役割にとどまらず、多様な学びのニーズへの受け皿として、その役割を増している。自分の興味・関心等に応じ、自分のペースで学べる定時制・通信制の教育は、不登校・中途退学経験者等への学び直しの機会の提供など、困難を抱える生徒の自立支援等の面で大きく期待されるようになっている」としています*8。
- 定時制高校の現状として、設立当初想定されていた勤労学生の減少等により、入学希望者が減少している一方、不登校経験者等様々な要因を抱えた生徒や、自分のニーズに合った授業を求めている生徒など、多様な生徒が入学しています。
- 定時制高校の存在意義が変化してきているため、生徒のニーズに合わせ、生徒が自分の望む学習形態を選択できる学校、学び直しもできる学校として、定時制高校を再編する必要があります。

*8 中央教育審議会初等中等教育分科会高等学校教育部会 審議まとめ～高校教育の質の確保・向上に向けて～（平成26年6月）

第2章 県立高等学校編成整備計画の実施計画

- ここでは、前述の「IV 時代の変化に対応した魅力ある学校づくり」で示した方向性を踏まえ、その実現に向けて必要となる取組を実施計画として策定します。

I 未来の沖縄を牽引しグローバルに活躍する人材の育成

1 北部地区への併設型中高一貫教育校の設置

- 北部地区における人材育成及び教育環境の充実を図るため、同地区に併設型中高一貫教育校を設置します。

学校の概要	
①設置場所	県立名護高等学校に県立中学校を併設
②通学区域	県全域
③学校規模	中学校：各学年1学級 高等学校：8学級（フロンティア科2学級、普通科6学級）
④学校の特色	北部地区に根差した特色ある教育活動や6年間の計画的・継続的な教育指導を展開し、国内外の難関大学進学等への対応を図ることで、21世紀をリードするグローバルな高い志を持つ人材を育成します。
⑤開校年度	令和5年度

- 開校後の志願動向や施設の状況、既設の県立中学校の状況及び他中学校への影響等を踏まえ、学級数を検討します。

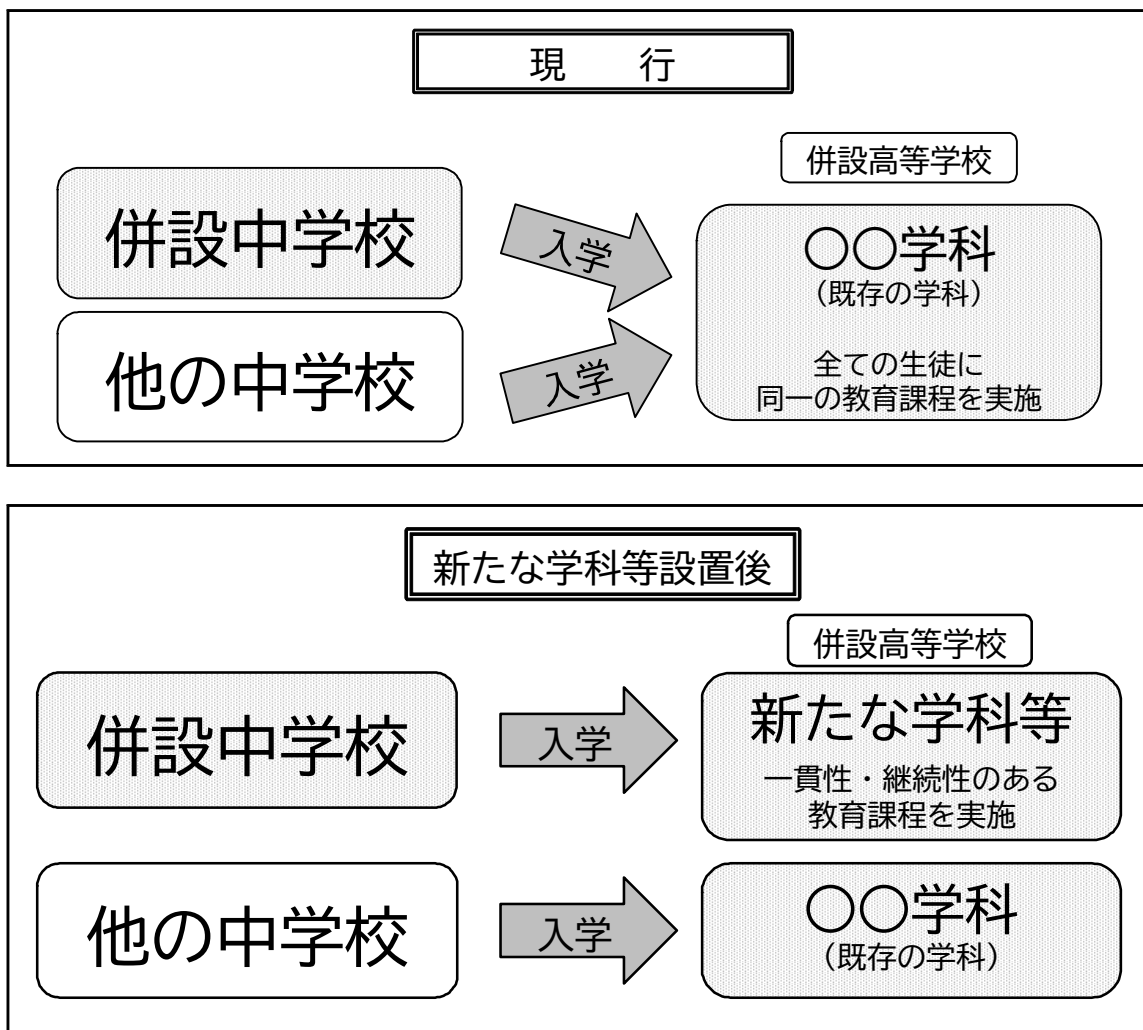
【工程】

R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	R11年度	R12年度	R13年度
開校準備室 開設	開校	学級数 検討	→	→					

2 併設型中高一貫教育校への学科等の新設

- 併設型中高一貫教育校においては、生徒の資質・能力の向上や教員の指導力向上等に継続的に取り組むとともに、より一貫性・継続性のある教育課程を実施するため、併設高等学校に新たな学科またはコースを設置します。
- 新たな学科等においては、高校からの入学者選抜は実施せず、併設中学校の卒業生のみが入学することとします。これにより、6年間の計画的・継続的な教育指導をより一層充実させることができ、中高一貫教育の効果を更に高めます。
- 他の中学校の卒業生が入学する既存の学科においては、これまでと同様に難関大学等への進学を目指す生徒のニーズに応えるため、進学に特化した教育課程の充実を図ります。

図 13：新たな学科等への接続イメージ



【工程】

R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	R10 年度	R11 年度	R12 年度	R13 年度
在り方 検討	→	設置準備	→	設置					

3 中高一貫教育の推進

- 高い意欲や能力を持った児童生徒の夢を実現し、沖縄の未来を拓く人材を育て、希望と活力に溢れ心豊かに暮らせる沖縄を創造するため、中高一貫教育を推進します。
- 北部地区の新たな県立中学校においては、開校後の志願動向や施設の状況、既設の県立中学校の状況及び他中学校への影響等を踏まえ、学級数を検討します。(再掲 P. 22)
- 中部地区及び那覇・南部地区においては、併設高等学校への新たな学科等の設置後(再掲 P. 23)、その成果と課題等を踏まえ、更に高度な教育課程を実施できるよう、併設中学校の学級増や中等教育学校への移行について検討します。
- 更なる中高一貫教育の推進については、既設校の実績や課題、本県の難関大学進学等の状況、他都道府県の設置状況、及び関係地域の児童・生徒数や中学校への影響等を踏まえつつ、学科改編や既設校の学級増、新たな中高一貫教育校の設置など、様々な可能性を検討します。
- また、地域や保護者のニーズ等を踏まえ、初等・中等教育の一層の多様化を図るため、市町村と連携し、進学に特化した新たな連携型中高一貫教育を検討します。
- 県立中学校においては、中学生は心身の重要な発達段階にあり、保護者等のもとでの生活が望ましいことから、自宅や身元引受先からの通学を原則としていますが、離島にあって、進学意欲があるものの通学が困難な生徒については、既設の寄宿舎への受入れを検討します。

【工程】

《北部地区》

R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	R10 年度	R11 年度	R12 年度	R13 年度
開校準備室 開設	開校	学級数 検討	→	→					

《中部地区／那覇・南部地区》

R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	R10 年度	R11 年度	R12 年度	R13 年度
新学科等 在り方検討	→	設置準備	→	設置	中等教育 学校検討	→			

II 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築の推進

1 新たな併設型高等特別支援学校の設置

- 高等学校におけるインクルーシブ教育システム構築の推進を図る目的から、併設型高等特別支援学校の複数校設置に取り組みます。
- 現在の設置状況（中部地区1校、那覇南部地区3校）を鑑み、北部地区及び中部地区における新たな併設型高等特別支援学校の設置に取り組みます。
- 新たな併設型高等特別支援学校の設置にあたっては、県立高等学校や特別支援学校の入試に関する動向を注視しつつ、既設校の志願状況等及び各地区の軽度知的障害高等部生徒数等を踏まえ、設置する高等学校を検討します。
- また、既設の4校については、施設の状況等も踏まえ、学級増を検討します。

【工程】

R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	R11年度	R12年度	R13年度
対象校検討調整			→	設置目標					

2 障害のある生徒とない生徒が共に学ぶしくみの研究

- 高等学校においては、障害のある生徒とない生徒ができるだけ同じ場で共に学びながら、それぞれの子どもが学習活動に参加している実感・達成感を持ち、生きる力を身に付けることを推進し、共生社会の形成及びインクルーシブ教育システムの構築に向けて取り組んでいます。
- 本県においては、障害のある生徒とない生徒が共に学ぶしくみと、一人一人の教育的ニーズに応じた学びを保障するための方策の調査研究を行うため、モデル事業として、知的障害の程度が中度・重度である生徒を対象とする「ゆい教室」を、令和3年度に県立真和志高等学校に設置しました。
- 「ゆい教室」における取組の成果と課題や、入学希望者の状況、各校の施設設備の状況等を踏まえ、障害のある生徒とない生徒が共に学ぶしくみの在り方を検討します。

【工程】

R4年度	R5年度	R6年度	R7年度	R8年度	R9年度	R10年度	R11年度	R12年度	R13年度
在り方検討			→						

Ⅲ 多様な学びの享受に向けた学校づくり

1 那覇地区定時制課程の再編

- 那覇地区では、泊高等学校、那覇商業高等学校、那覇工業高等学校の3校に定時制課程があり、それぞれが特色ある教育活動を展開していますが、定時制課程の存在意義が変化する中、入学希望者が減少しています。
- 教育ニーズの多様化に対応し、3校をより魅力ある学校にするため、泊高等学校を同地区の基幹校として、定時制課程の統合及び連携を図ります。
- 那覇商業高等学校定時制課程は泊高等学校に統合し、各課程において商業科目の充実を図ります。また、那覇工業高等学校定時制課程と泊高等学校においては、単位互換制度の拡充や、共通選択科目の導入など、生徒の多様なニーズに対応できるよう学校間連携を図ります。

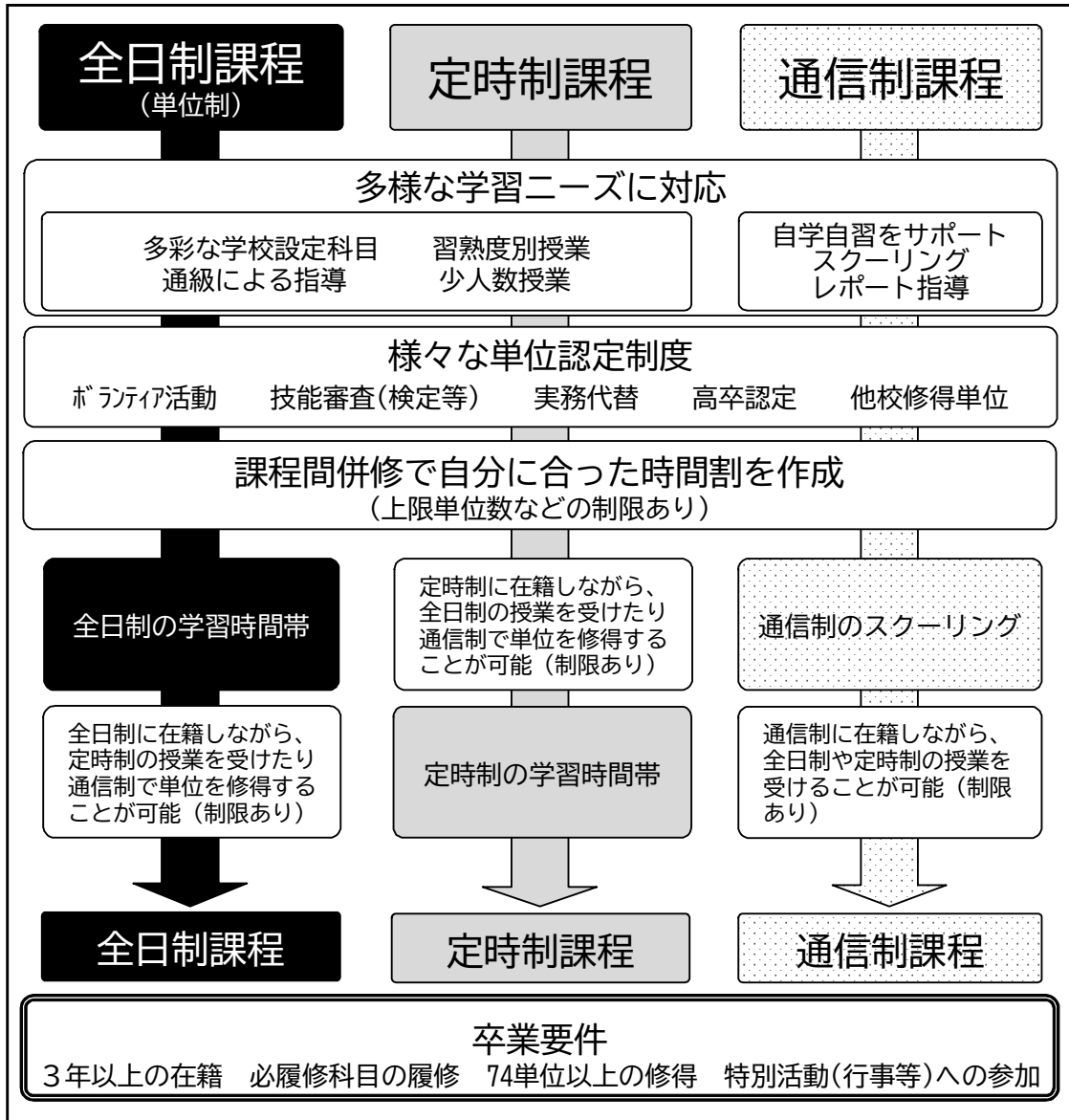
【工程】

R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	R10 年度	R11 年度	R12 年度	R13 年度
在り方 検討	→	再編							

2 多様な教育ニーズに対応するための泊高等学校の改編

- 泊高等学校は、定時制課程、通信制課程の2課程が設置された県内唯一の高等学校であることに加え、就学支援センターも併設しています。その泊高等学校に、新たに全日制課程を設置し、生徒が自分の興味・関心に応じて、自分のペースで柔軟に学ぶことができる学校に改編します。
- 全日制課程、定時制課程、通信制課程のいずれかに在籍しながら、他の2課程の授業も受けることができる課程間併修を充実させ、単位制高校の特色を活かし、生徒が自分の学習スタイルに合わせて授業を受けることができるなど、多様な学びへの対応を図ります。

図 14：泊高等学校改編後のイメージ



【工程】

R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	R10 年度	R11 年度	R12 年度	R13 年度
在り方 検討	→	改編準備	→	改編					

3 リスタート校（学び直し拠点校）としての定時制課程の連携

○ 泊高等学校を中心に、各地区の定時制課程をリスタート校（学び直し拠点校）に位置づけ、ネットワークを構築し情報や取組の共有を図ったうえで、以下のような学び直しのための支援を行います。

(1) きめ細かい学習指導

- ・加配教員の配置等による習熟度別授業や少人数授業の実施
- ・30分程度の授業など、生徒の実態に合わせた授業時間の弾力化
- ・学び直し支援のための教員向け研修の実施

(2) 生徒に寄り添った細やかな心のケア

- ・特別支援学校教員免許状を有する教員の配置
- ・スクールカウンセラーの配置及び教員と連携した支援体制の充実

(3) 社会的自立に繋がる教育課程の編成

- ・ソーシャルスキルの向上に向けた科目の設定
- ・学び直しのための科目の設定
- ・必履修科目における学び直しの取組

(4) 就職・進学に向けた取組の強化

- ・就業に向けた社会体験実習の実施
- ・バイターン^{*9}制度の体系化による就業支援
- ・進学のための課外講座の充実

(5) 中学校との連携

- ・支援が必要な生徒への適切な進路指導や進路確保のための積極的な情報提供

【工程】

R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	R10 年度	R11 年度	R12 年度	R13 年度
ネットワーク構築等				→					

*9 職業的経験であるアルバイトと、企業内の教育的なインターンシップをかけた新しい「中間的就労」のモデルを指す。就職を希望する高校生と若い人材を採用したい県内企業との職業マッチングを行い、在学中のアルバイト雇用から卒業後の正規雇用へ職場定着を支援する取組。

4 高等学校における多様な学びの在り方の研究

- 小中学校で様々な困り感を抱え、学びのつまずきを経験しながらも、社会的・職業的自立を目指し学習意欲のある生徒に対し、高校における学びを保障するため、義務教育段階の学習内容の確実な定着を図る教育課程を研究・実践する「高等学校における多様な学びの在り方研究モデル校」を指定し、その成果や課題等を踏まえ、生徒一人一人の能力や適性に応じた高等学校における多様な学びを全県的に拡充していきます。
- 研究モデル校は、大学等への進学指導や就職指導の充実に取り組み、生徒の進路保障を図るとともに、柔軟な教育課程の編成や習熟度別学習による、生徒の実態に応じたきめ細やかな指導を行うなど、学習における困り感や課題を抱える生徒に対する取組や教育課程の研究が進んでいる学校を指定します。
- これまでの取組や研究を支援するため、習熟度別授業等に対応した人員配置等により、学校の実態に応じた高等学校における多様な学びの在り方の研究を推進し、個々の生徒の学びの状態に応じた教育の充実を図ります。

【工程】

R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	R10 年度	R11 年度	R12 年度	R13 年度
研究 モデル校 指定	拡充			→					

IV その他

時代に合った専門学科等の再編

- 近年の少子高齢による労働人口の減少や、社会のグローバル化や技術革新の急速な進展による人材需要の高まりなどから、専門高校においては担い手の育成が必要となる一方で、志願倍率や定員充足率が低下し、定員割れの状況が続く専門学科等もあります。
- 土木・建築産業や ICT 関連産業など、今後も人材需要の高まりが見込まれる分野については、関連する専門学科等の設置を検討するとともに、定員割れの状況が続く専門学科等については、近隣学校も含め統合等を検討するなど、時代に合った専門学科等の編成を推進します。

【工程】

R4 年度	R5 年度	R6 年度	R7 年度	R8 年度	R9 年度	R10 年度	R11 年度	R12 年度	R13 年度
在り方 検討				→					

(参考1) 各学科の状況

1 普通科

- 令和2年度現在、普通科を設置している高校は全日制、定時制合わせて36校で、募集定員の約57%を占め、一般入学志願者数についても全体の約60%を占めています。
- 普通科で学ぶ生徒の能力、適性、興味・関心、進路等は一層多様化してきており、類型・コースの設置や選択幅の拡大など、個に応じたきめ細かい指導の充実を図っています。
- また、学習に対するニーズが多様化する中、国は普通科の特色化・魅力化を図るため関係法令を改正し、特色・魅力ある学科の設置が各設置者の判断によって可能となっており、今後は国の動向を注視しながら、本県における普通科の在り方について検討します。

2 理数に関する学科

- 令和2年度現在、理数に関する学科を設置している高校は6校で、科学及び数学における基本的な概念、原理、法則などについての系統的な理解を深め、科学的、数学的に考察し表現する能力と態度を育て、創造的な能力を高める理数教育を推進しています。
- そのうち2校においては、「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」として国の指定を受け（令和2年度現在）、先進的な科学技術、理数系教育をとおして、生徒の科学的能力及び技能並びに科学的思考力、判断力及び表現力を培い、将来国際的に活躍し得る科学技術人材の育成に取り組んでいます。

3 外国語・国際関係に関する学科

- 令和2年度現在、外国語・国際関係に関する学科を設置している高校は4校で、コミュニケーション能力の育成を目指した外国語教育や国際理解教育を推進するとともに、地域の国際交流活動への参加や姉妹校交流等を図るなど、国際社会で活躍できる人材の育成に取り組んでいます。
- そのうち1校においては、平成30～令和2年度に「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」として国の指定を受け、国際化を進める国内外の大学を中心に、企業、国際機関等と連携を図り、グローバルな社会課題、ビジネス課題をテーマにした横断的・総合的な学習、探究的な学習をとおして、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図っています。

4 体育・音楽・美術に関する学科

- 体育に関する学科は、令和2年度現在2校に設置し、体育に関する専門的な学習をとおし、高度な運動技能の修得、競技力の向上及び指導者の育成に取り組むとともに、各自の適性・能力の伸長及び生涯スポーツに親しむ基礎的な知識・技能・態度の育成を図っています。

- 音楽・美術に関する学科は、令和2年度現在1校に設置し、音楽や美術に関する専門的な学習をおし、豊かな感性と創造力・表現力を有する人材の育成に取り組んでいます。
- これらの学科については、近年における生徒の進路希望等の多様化に応えるよう充実を図っています。

5 環境に関する学科

- 令和2年度現在、環境に関する学科は1校に設置し、やんばるの豊かな自然環境での体験学習をおし、環境に対する興味・関心や基礎的な知識・技術を高め、環境を大切にする考え方や行動ができ、豊かで活力ある地域社会づくりに貢献できるグローバルな人材の育成に取り組んでいます。

6 農業に関する学科

- 令和2年度現在、農業に関する学科を設置している高校は全日制、定時制合わせて6校で、生産、加工、販売、更には食育を取り入れるなど、幅広い農業教育を行っています。
- 安定的な食料生産の必要性や農業のグローバル化への対応など、農業を取り巻く社会的変化を踏まえ、農業や農業関連産業をとおして、地域や社会の健全で持続的な発展を担う人材の育成に取り組んでいます。

7 工業に関する学科

- 令和2年度現在、工業に関する学科を設置している高校は全日制、定時制合わせて10校で、工業技術の高度化、環境・エネルギー問題、情報化やネットワーク化の進展等に対応するとともに、ものづくりや創造性の育成を重視した工業教育を行っています。
- 安全・安心な社会の構築、職業人としての倫理観、環境保全やエネルギーの有効な活用、産業のグローバル競争の激化、情報技術の技術革新の開発が加速することなどを踏まえ、ものづくりをとおして、地域や社会の健全で持続的な発展を担う人材の育成に取り組んでいます。

8 商業に関する学科

- 令和2年度現在、商業に関する学科を設置している高校は全日制、定時制合わせて9校で、学習指導要領で示されているマーケティング分野、ビジネス経済分野、会計分野、ビジネス情報分野の4領域に関する学科の充実を図るとともに、観光分野に関する学科・コースを設置し、観光産業の振興に寄与する商業教育を行っています。
- 経済のグローバル化、情報技術の進歩、観光産業の振興、地域におけるビジネスの推進などを踏まえ、ビジネスをとおして、地域産業をはじめ経済社会の健全で持続的な発展を担う人材の育成に取り組んでいます。

9 水産に関する学科

- 令和2年度現在、水産に関する学科を設置している高校は2校で、水産物の供給や海技従事者の育成、及び海洋資源の保全や海洋性レクリエーションなど、海を総合的に活用する教育に取り組んでいます。
- 水産教育の基本的な学科である「海洋漁業系・水産食品系」の一層の充実と地域水産業の実態に即した漁業後継者の育成を図るとともに、海洋環境、マリンスポーツなどの内容を取り入れた教育を推進しています。

10 家庭に関する学科

- 令和2年度現在、家庭に関する学科を設置している高校は5校であり、衣食住、ヒューマンサービスなど、多様化・高度化する消費者ニーズを的確に把握し、必要な物資やサービスの提供など、生活の質の向上と社会の発展に寄与し、生活文化を伝承・創造する人材の育成に取り組んでいます。
- 少子高齢化、価値観やライフスタイルの多様化など、生活産業を取り巻く諸課題に対応できる専門的な知識と技術の習得、職業人としての倫理観を踏まえ合理的かつ創造的に解決する能力と実践的な態度の育成を重視し、家庭科教育のより一層の充実を図っています。

11 情報に関する学科

- 令和2年度現在、情報に関する学科を設置している高校は2校で、情報産業の進展に対応するため、創造力、考察力、問題解決力、統合力、職業倫理等を身に付け、本県情報産業の発展に寄与する人材の育成に取り組んでいます。
- 情報技術やグローバル化の進展に伴う、即戦力となる技能習得や、高度な情報技術をもつ IT 人材の需要増大などを踏まえ、次世代の指導者や、高い技術力により地域に貢献できる人材を育成するため、情報教育のより一層の充実を図っています。

12 福祉に関する学科

- 令和2年度現在、福祉に関する学科を設置している高校は2校であり、地域共生社会の実現に向け、社会福祉に関する基礎的・基本的な知識・技術の習得や、地域を学びのフィールドとして地域における自立生活支援や福祉ニーズの多様化などに対応した福祉教育の充実に取り組んでいます。
- 急速に進展する高齢化に伴う福祉ニーズの高度化と多様化への対応、倫理的課題やマネジメント能力・多職種協働の推進、介護ロボットなど福祉・介護現場における ICT の進展などを踏まえ、福祉を通じ、人間の尊厳に基づく地域福祉の推進と持続可能な福祉社会の発展を担う職業人の育成を図っています。

13 総合学科

- 令和2年度現在、総合学科を設置している高校は3校で、多様な生徒の持つ様々な能力・適性等に対応できる教育課程の充実に取り組んでいます。
- 学習ニーズの多様化を踏まえ、普通科目及び専門科目を幅広く開設し、生徒が自己の興味・関心に基づき主体的に履修科目を選択することにより、将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深める学習、学ぶことの楽しさや成就感を体感できる学習を推進しています。

14 専攻科

- 令和2年度現在、1校に設置している専攻科（漁業科・機関科・無線通信科）については、近年、世代交代の時期を迎えている産業現場からの人材育成の要求が高まっていることから、より高度な技術の習得や職業資格の取得のため、一層の充実を図っています。また、高等学校の本科と連続した教育課程を編成するなど、特色を生かした教育内容の拡充に取り組んでいます。

(参考2) アンケート調査について

名称：次期県立高等学校編成整備計画策定に係る生徒・保護者等へのアンケート調査

1 調査の目的

生徒・保護者等に対して、本県の高校教育の現状と課題及び県立高等学校の編成整備に関するアンケートを実施し、計画策定の参考とするため。

2 調査事項と調査対象

(1) 調査の対象

①調査の校種・・・県内全公立中学校・高等学校

②調査対象者

ア 中学校生徒 3年生

イ 高等学校生徒 3年生

ウ 保護者 対象中学生の保護者

対象高校生の保護者

エ 県民 高等学校保護者を対象とし、調査対象生徒の学級以外へ依頼

(2) 調査学級数

○中学校：1学級抽出して実施

○高等学校：学科ごとに1学級抽出して実施

(3) 保護者は調査対象生徒の保護者

(4) 県民については、高等学校保護者を対象とし、対象生徒保護者以外へ1学級程度を抽出

3 アンケート調査の時期 令和2年3月～6月

4 アンケートの回答者数

(1) 中学生 回答者数 約3千5百人

(2) 中学生保護者 回答者数 約2千6百人

(3) 高校生 回答者数 約4千4百人

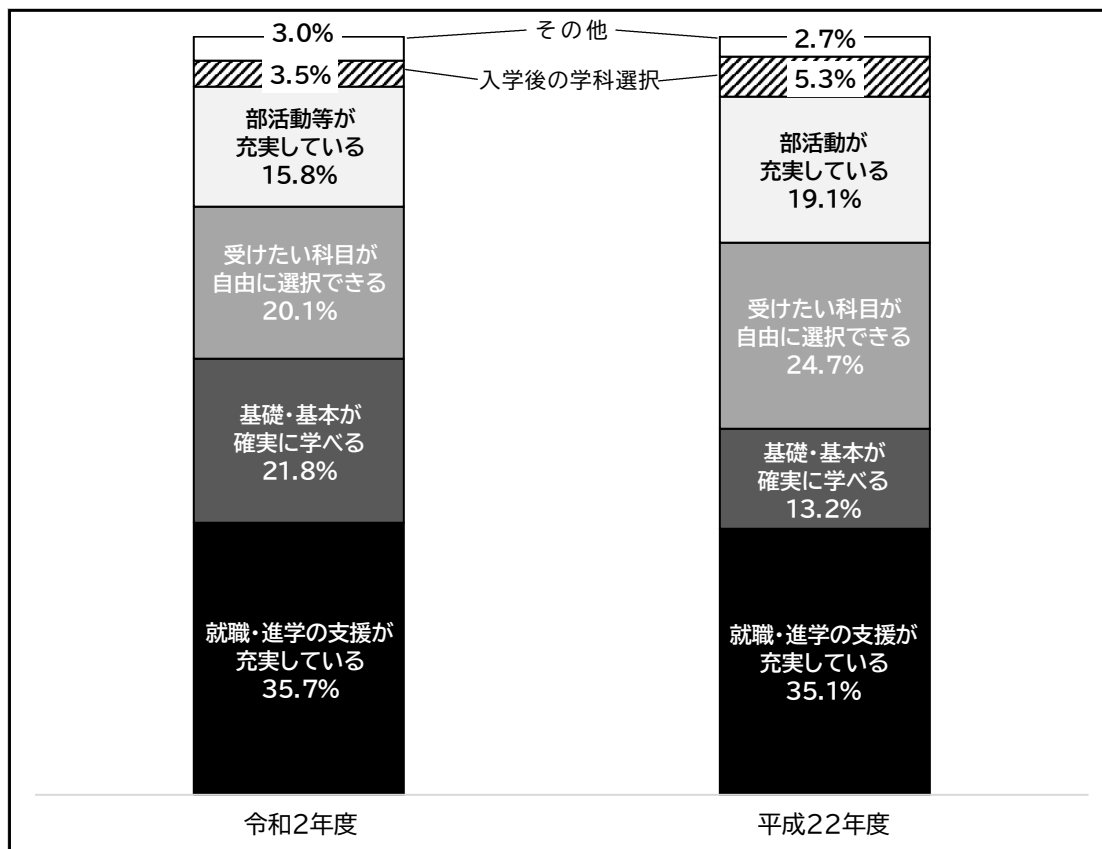
(4) 高校生保護者 回答者数 約2千2百人

(5) 県民 回答者数 約1千7百人

5 調査結果

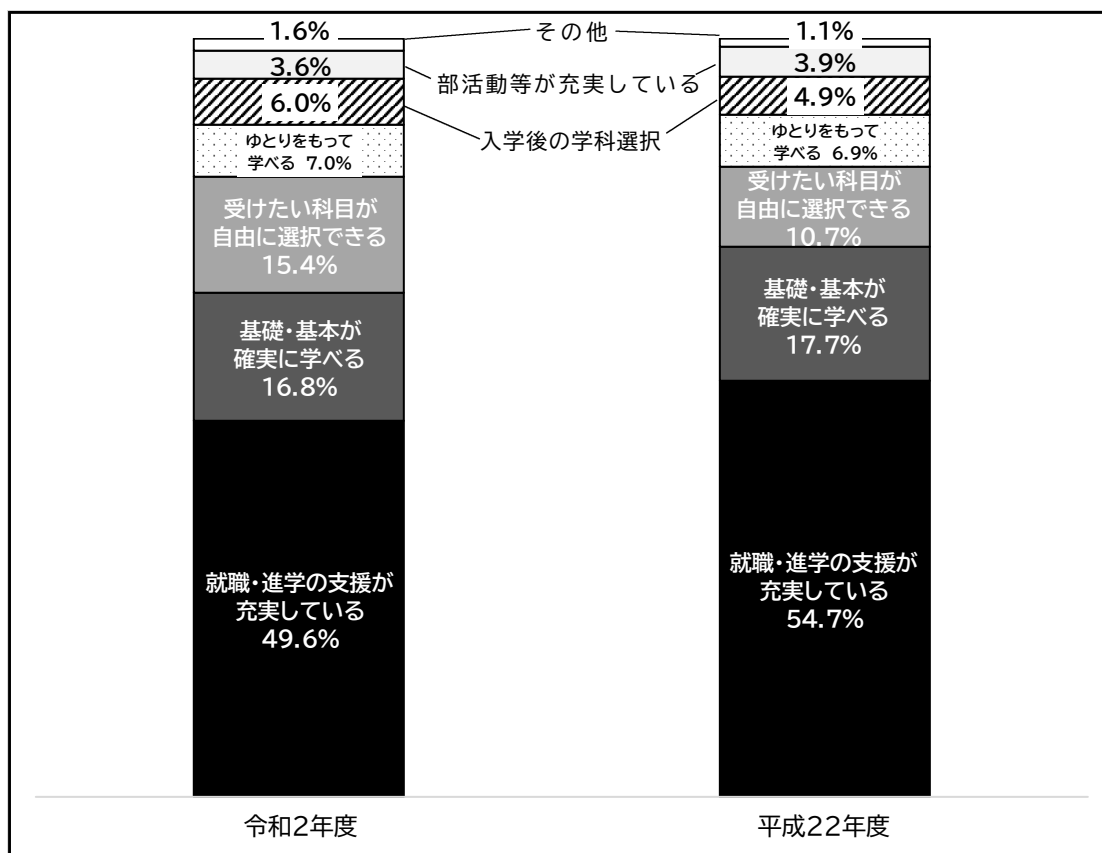
- 中学生が「高校に期待すること」については、「就職・進学の支援が充実している」35.7%、「基礎・基本が確実に学べる」21.8%、「受けたい科目が自由に選択できる」20.1%となっています（図15）。
- 前回調査と比較すると、「部活動等の充実」や「自由な科目選択」の割合が減少し、「基礎基本が確実に学べる」ことへの期待が高まっていることがわかります。

図15：中学生が高校に期待すること



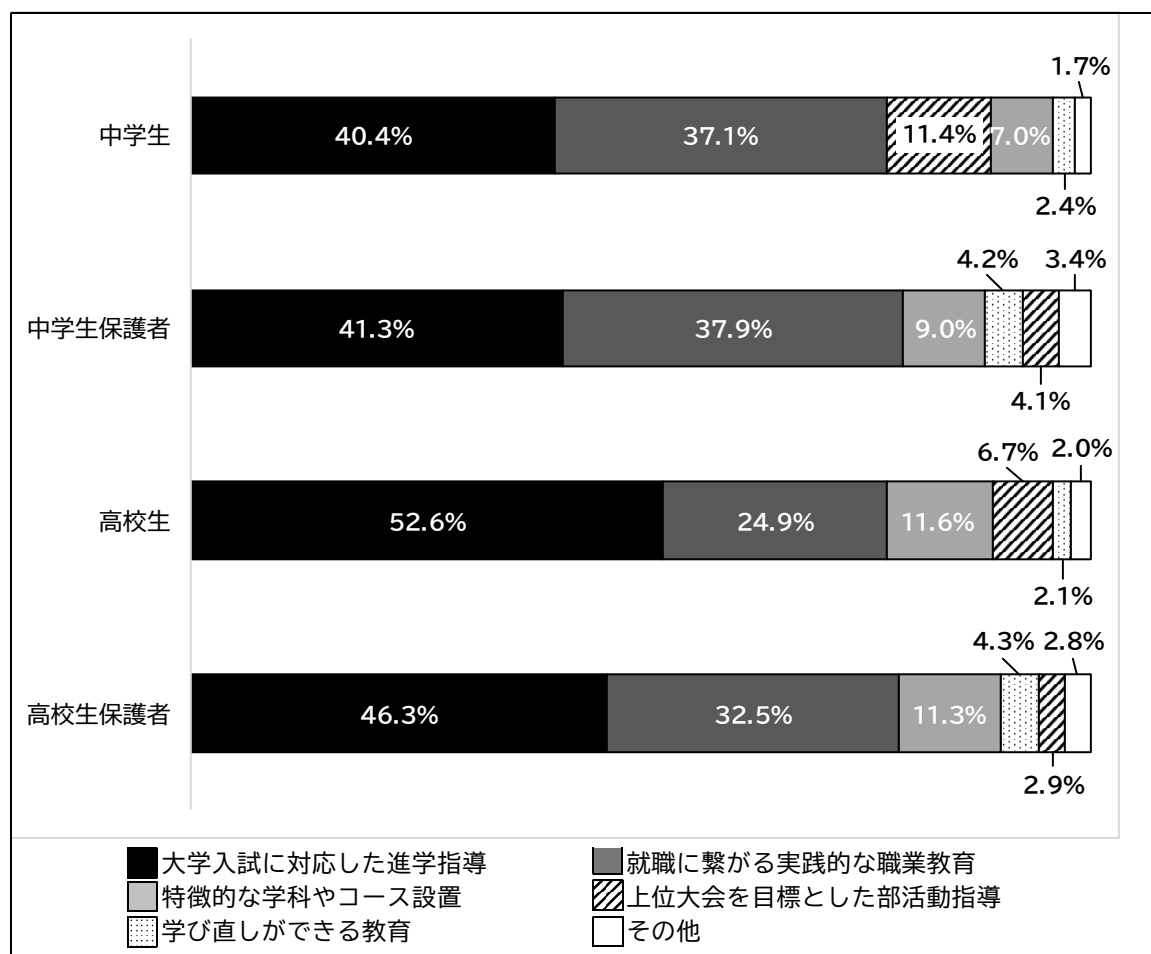
- 中学生の保護者が「高校に期待すること」については、「就職・進学の支援が充実している」49.6%、「基礎・基本が確実に学べる」16.8%、「受けたい科目が自由に選択できる」15.4%となっています（図16）。
- 前回調査と比較すると、「就職・進学の支援」や「基礎基本が学べる」の割合が減少し、「自由な科目選択」への期待が高まっていることがわかります。
- 中学生及びその保護者のどちらも、就職や進学など、高校卒業後の進路に関する支援の充実を期待しており、また、基礎・基本が学べる学校や、生徒の興味・関心や進路等に応じて受けたい科目を学べる学校を望んでいることがわかります。

図16：中学生保護者が高校に期待すること



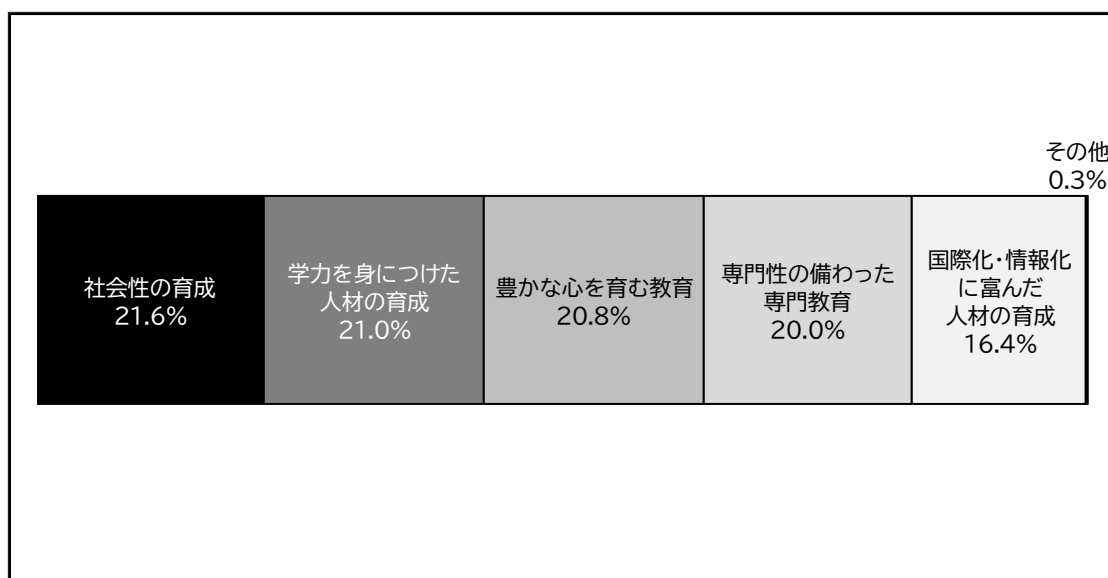
- 中学生が「県立高校に期待する特色」については、「大学入試に対応した進学指導」40.4%、「就職に繋がる実践的な職業教育」37.1%、「上位大会を目標とした部活動指導」11.4%となっています（図17）。
- 中学生の保護者が「県立高校に期待する特色」については、「大学入試に対応した進学指導」41.3%、「就職に繋がる実践的な職業教育」37.9%、「全国的に例が少ない特徴的な学科やコース設置」9.0%となっている一方で、「上位大会を目標とした部活動指導」は4.1%となっており、部活動指導について中学生と差異が見られます（図17）。
- 高校生が「県立高校に期待する特色」については、「大学入試に対応した進路指導」52.6%、「就職に繋がる実践的な職業教育」24.9%、「全国的に例が少ない特徴的な学科やコース設置」11.6%となっています（図17）。
- 高校生の保護者が「県立高校に期待する特色」については、「大学入試に対応した進学指導」46.3%、「就職に繋がる実践的な職業教育」32.5%、「全国的に例が少ない特徴的な学科やコース設置」11.3%となっています（図17）。
- 生徒及び保護者とも、大学進学に関する指導及び就職に繋がる職業教育の充実への期待が高く、同様の結果となっています。

図17：県立高校に期待する特色



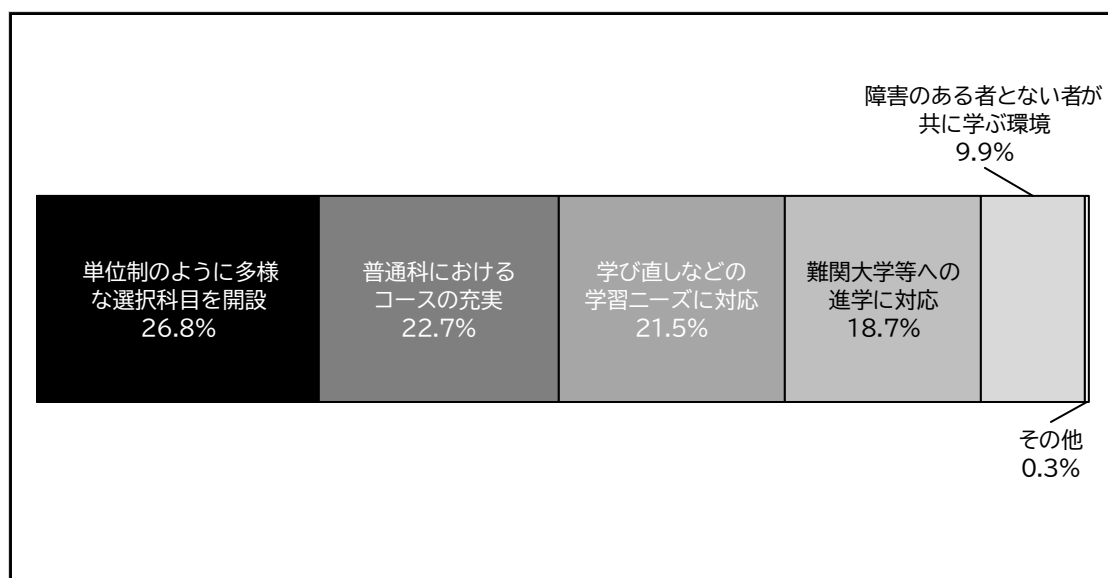
- 県民が「これからの高校教育に望むこと」については、「社会性の育成」、「しっかりと学力を身につけた人材の育成」、「豊かな心を育む教育」、「専門性の備わった専門教育」がそれぞれ21.6%、21.0%、20.8%、20.0%と、ほぼ同率となっています（図18）。

図18：県民がこれからの高校教育に望むこと



- 県民が考える「これからの高校の方向性」については、「単位制のように多様な選択科目の開設ができる学校」26.8%、「普通科におけるコースが充実した学校」22.7%、「学び直しなどの学習ニーズに対応した学校」21.5%、「計画的なシステムを構築し、難関大学等への進学に対応できる学校」18.7%となっています（図19）。

図19：県民が考えるこれからの高校の方向性



- 高校生の「学科等の満足度」については、「満足」「やや満足」を合わせ、概ね満足と回答しているのは全体で89.7%となっています（図20）。
- 学科別にみると、通信制、普通科及び情報科は満足度が高くなっています。また、水産科、定時制及び総合学科は満足度が比較的低くなっています（図20）。
- 学科ごとに満足の度合いに差異がみられることから、生徒が興味・関心、適性、将来の目標等を踏まえて進学先を検討することや、高等学校において生徒の能力、適性、進路等を充分把握し、そのニーズに応えることの必要性がわかります。

図20：学科等の満足度

